

第五章 山車のからくり

第一節 からくりの概要

(一) 祭礼におけるからくり人形

山車からくりは、山車に人形を載せて、間接的に操作して演技を行うからくり人形の一種である。愛知・岐阜両県には、江戸時代から祭礼の主役にからくり人形を載せた山車を曳く祭りが多く、現在でも二百台を超える山車が保存されており、全国の山車からくりの八割以上ともいわれている。

濃尾平野には中世から大山・車楽おおやま だんじりと呼ばれる山車があり、この大山にからくり人形を載せたのがはじめとされている。そして、大阪の竹田からくり芝居を通して、からくりの知識や技術が伝わると、様々な機構を搭載した人形へと発展し現在にいたっている。

(二) からくり人形の演技

人形を操作する方法は、糸を操作する糸からくりと差し金さしや胴串どうくしと呼ばれる操作棒で操作する離れからくりに大別することができる。また、人形の動きの種類は、手、足、首を動かす所作から、倒立、肩車、宙吊り、文字書き、綾渡り、大車輪、乱杭渡り、面破り、変身、変顔、出現、舞いなど技をみせるものがある。所作や技を実現するには、機械的なしくみ機構が必要である。操作することによって生じる力の伝達や変換を目的とした仕組みを機構という。機構にはいくつかの機械要素があり、カム、歯車、滑車、てこなどである。これらの機械要素技術の組み合わせた機構がからくりである。

所作のうち、うなずき、会釈、お辞儀については、図5-1に示すとおり、

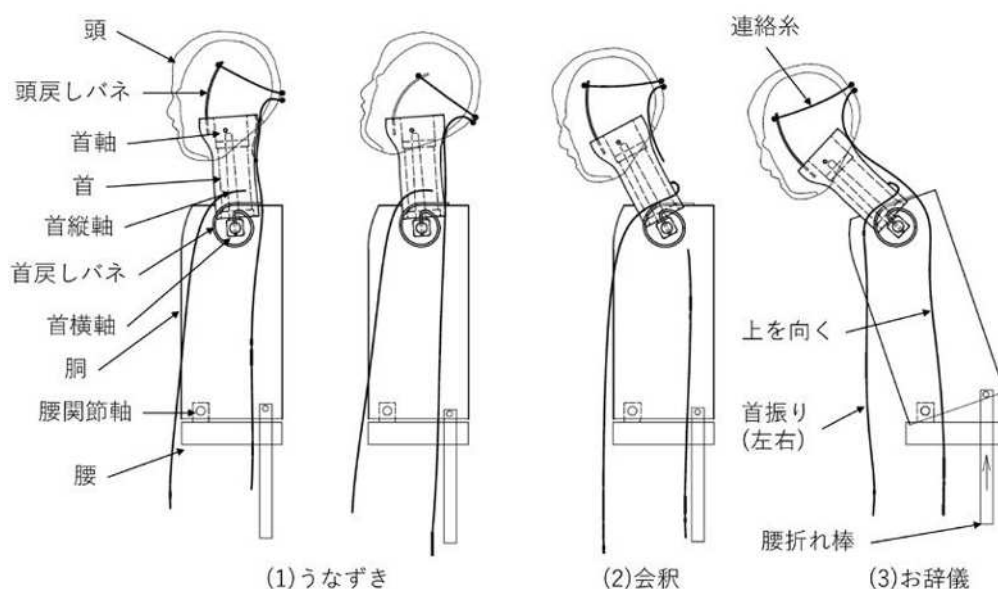


図5-1 うなずき、会釈、お辞儀の区別

うなずきは頭を首軸で振ること、会釈は首縦軸に直交する首横軸で振ること、お辞儀は腰折れ棒で胴を押し上げることそれぞれ表現している。



第二節 各山車のからくり・操作方法

安宅車、若戎車、清影車の各からくりは、前人形と上山人形から構成され、各々の人形には複数の関節や台座、樋を駆使して動きを表現している。本節では各からくり人形の所作と動くしくみについて述べる。

(一) 安宅車

安宅車では前人形に幣振り人形、上山人形には弁慶と義経を配置し、弁慶が能狂言『安宅』を舞う。

1 義経

右手に扇子を持ち座位のままで動きはない。大将人形ともいわれ構造はシンプルである。動作は「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「左腕を上げる」、「右腕を上げる」の五つのところ、現用では左腕は動かさず四本の紐で操作し、一人の操作者で行う。比較的大きな人形は、一つ一つの部品



写真 5-1 滑車と首縦軸

は重く、操作に必要な力は増し紐を引くことが重く感じる。そこで、紐を引く力を軽減するための工夫が腕滑車と首縦軸にみられる(写真5-1)。前者は、扇子を持ち右腕を上げるしくみに定滑車を使用している。後者は首を左右に振る首縦軸を直接回している点にある。

2 弁慶

可動式の樋にロクロ付きの台車を備え、舞台を縦横に動くことができる。また、右手に扇子をもち、頭、手足を細やかに動かすことができる。特に、腕の構造は複雑で複数の関節軸や滑車を用いている。右の掌の軸に扇子の要を固定し、開ける方の扇子の骨に紐が繋がっており、一方の骨は紐で手のひら側に縛られている。紐を引くと、扇子の骨が動き開けることができ、現用での閉じは扇子の要付近に輪ゴムを巻きつけ反発力で実現している。

動作は、「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「腰落とし」、「左腕を上げる」、「左手を寄せる」、「左腕を開く」、「右腕を上げる」、「右手を寄せる」、「扇子を開ける」、「左足を上げる」、



写真 5-2 休眠機構

「右足を上げる」で、十二本の紐と樋の操作を二人から三人で行う。台車の下部の操作部は動作ごとの操作レバーを設け、操作性の簡便化を図っている。

現用では、使っていない滑車や糸案内が複数存在し、また、右腕の回内外や扇子の閉じの動きの痕跡を確認することができるが、操作紐の取り回しを兼用することで簡略化している（写真5-2）。

3 幣振り人形

両手でご幣を持ち、左右に体を振る。顔の表情を変えることができる。顔は眉、目、鼻、口の動きがあるように思われるが、現在は眉のみ動く（写真5-3）。体の構造はシンプルで支柱に胴体が固定され、頭と腕が取りついている。足はなく、肘関節は紐で結んである。ご幣は支柱と両手で固定されている。支柱を回転すると体の向きが変わり、左右に振ると体を揺らすことができる。からくりは首振りと眉を動かすことができ、操作は一人で行う。

頭部の内部を観察すると、眉の他に目、鼻、口を動かす機構が残っていることがわかる。操作紐の断線やレバーの折損などが考えられる。



写真 5-3 変顔

(二) 若戎車

若戎車では前人形に采振り人形、上山人形には若恵比寿と宝船を配置し、能『岩船』の一部を取り入れた演目に合わせて、若恵比寿が鯛を釣り、宝船の出

現を行う。

1 若恵比寿

可動式の樋にロクロ付きの台車を備え、舞台を縦横に動くことができる。また、右手に釣竿をもち、頭、手足を動かすことができる。両ひざには、ぜんまいばねが備わっているのが特徴である。動作は、「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「左腕を上げる」、「左手を寄せる」、「右腕を上げる」、「左足を上げる」、「右足を上げる」で、八本の紐と樋の操作を四人で行う。

現用では、右腕の回内外の動きをピン打ちで固定しているが、機能としては有している。また、過去の修理で交換したと思われる胴体部分が保管されているが、旧胴体に埋め込まれている二か所の滑車のうち、右側は自在滑車のところ、現用では固定滑車となっており、使用されていない（写真5-4）。これは、右腕を上げる動作において、

右手側の紐の結び目と滑車への入射角の変位が大きく、固定滑車では対応できず滑車から紐が外れることが原因と考えられる。

2 采振り人形



写真 5-4 新旧胴体の比較



両手に采を持ち、頭、手足を動かすことができる。台座に支柱をたて、胴体が固定され、支柱を回すことで体の向きが変わる。腕を上げるしくみはテコである。動作は「首を左に振る」、「首を右に振る」、「左腕を上げる」、「右腕を上げる」、「左足を上げる」、「右足を上げる」の六つであるが、左腕と右足、右腕と左足を結び四本の紐と支柱を一人で操作を行う。

頭部を分解調査すると、首の鯨ばねの破損と

「顔を上げる」動作の痕跡がある。図5-2に「顔を上げる」動作を示す。操作紐を引くと、首軸を中心に後頭部が引き寄せられ、鯨ばねが撓む。操作紐を緩めると、鯨ばねの反発力が解放され元に戻る。鯨ばねの先端と後頭部の接続紐によって正対したときの顔の向きが決まる。

台座は、山車側の構造に応じて改造を施した形跡がある。また、現用では二つの穴に操作紐を通してあるが、五つの穴が開いており、前述の四つの動作に「顔を上げる」を加えた五つと合致する。

支柱には留め機能の痕跡がある。立ち姿を固定し、留めのツメを外すと座る

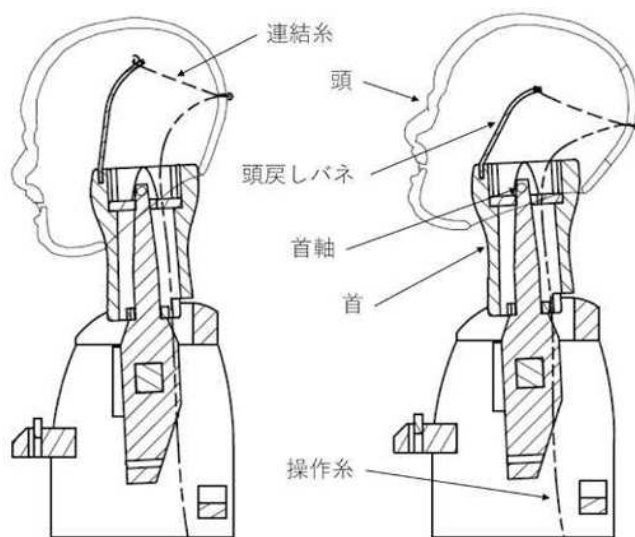


図5-2 顔を上げる

姿となる。

3 宝船

近代に入ってから設置されたものである。宝袋を半割し宝船が出現し、帆を上げる一連の動作となり、一人で操作を行う。動滑車の原理を応用して宝船出現、帆立てを實現している（写真5-5）。

(三) 清影車

清影車では、前人形に幣振り人形、上山人形には豊玉姫と彦火々出見尊を配置し、謡曲『玉ノ井』を舞う。

1 彦火出見尊

右手に軍配を持ち、座位のままで動きはない。大将人形ともいわれ構造はシンプルであるが、「うなずき」機能を有している。左腕は右腕と同じ構造になっており、腕滑車を入れると動く作りである。動作は「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「右腕を上げる」で、四本の紐を一人で操作を行う。

首を固定する首縦軸に首横軸が直交しており、首縦軸で首振り、首横軸で前傾をすることができ、操作は「首を左に振る」と



写真5-6 首振り機構



写真5-5 全景

「首を右に振る」の二本の紐を同時に引くと実現する（写真5-6）。

2 豊玉姫

可動式の樋にロクロ付きの台車を備え、舞台を縦横に動くことができる。また、右手に打杖^{うちづえ}をもち、頭、手足を動かすことができる。特に「面かぶり」で龍神に変身することが特長である。動作は、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「腰折れ」、「胸明け」、「面かぶり」、「面外し」、「左腕を上げる」、「左手を寄せる」、「右腕を上げる」、「右手の回内」、「右手の回外」、「左足を上げる」、「右足を上げる」で、十三本の紐と樋の操作を三人で行う。

頭部の観察によつて、頭はバネ特性を持つ、後頭部の穴、首裏側の溝を確認し、これらは、「顔を上げる」動作の痕跡と機能である（前述の図5-2参照）。後頭部からの操作紐が解けたことが原因と考えられる。

面かぶり機構は、胸中に隠されたお面は、胸板が開いた瞬間に喉元の滑車を中心に回転しお面をかぶる（写真5-7）。

3 幣振り人形

右手に御幣をもち、頭、手足を動かすことができる。台座に支柱を立て、胴体が固定され、支柱を回すことで体の向きを変えることができる。前人形とし



写真 5-7 面かぶり

ては、構造が複雑で動きが多い（写真5-8）。動作は、「顔を上げる」、「首を左に振る」、「首を右に振る」、「左腕を上げる」、「右腕を上げる」、「右手を寄せる」、「左足を上げる」、「右足を上げる」で、八本の紐を二人で操作を行う。

台座にロクロが備わっているのは珍しい。

第三節 各山車のからくりの図面

（一）からくり人形の調査と図面化にあたって

- 1 からくり人形の内部構造や動くしくみを「機構」とする。
- 2 調査対象は、からくり人形と付属する用具とする。
- 3 調査対象は、現用を原本とし、旧体が現存している場合は参考とする。
- 4 からくりの痕跡も含めて調査を行う。
- 5 採寸は、経年使用や修理を経て、現在にいたっていることを考慮する。
- 6 記録図面として作図を行う。
- 7 部品表の材料名は、具体的に特定しない。
- 8 数値の丸め方や描写により、実際の寸法とは異なる場合がある。
- 9 描写は、製図手法の第三角法とアイソメトリック図法を用いる。

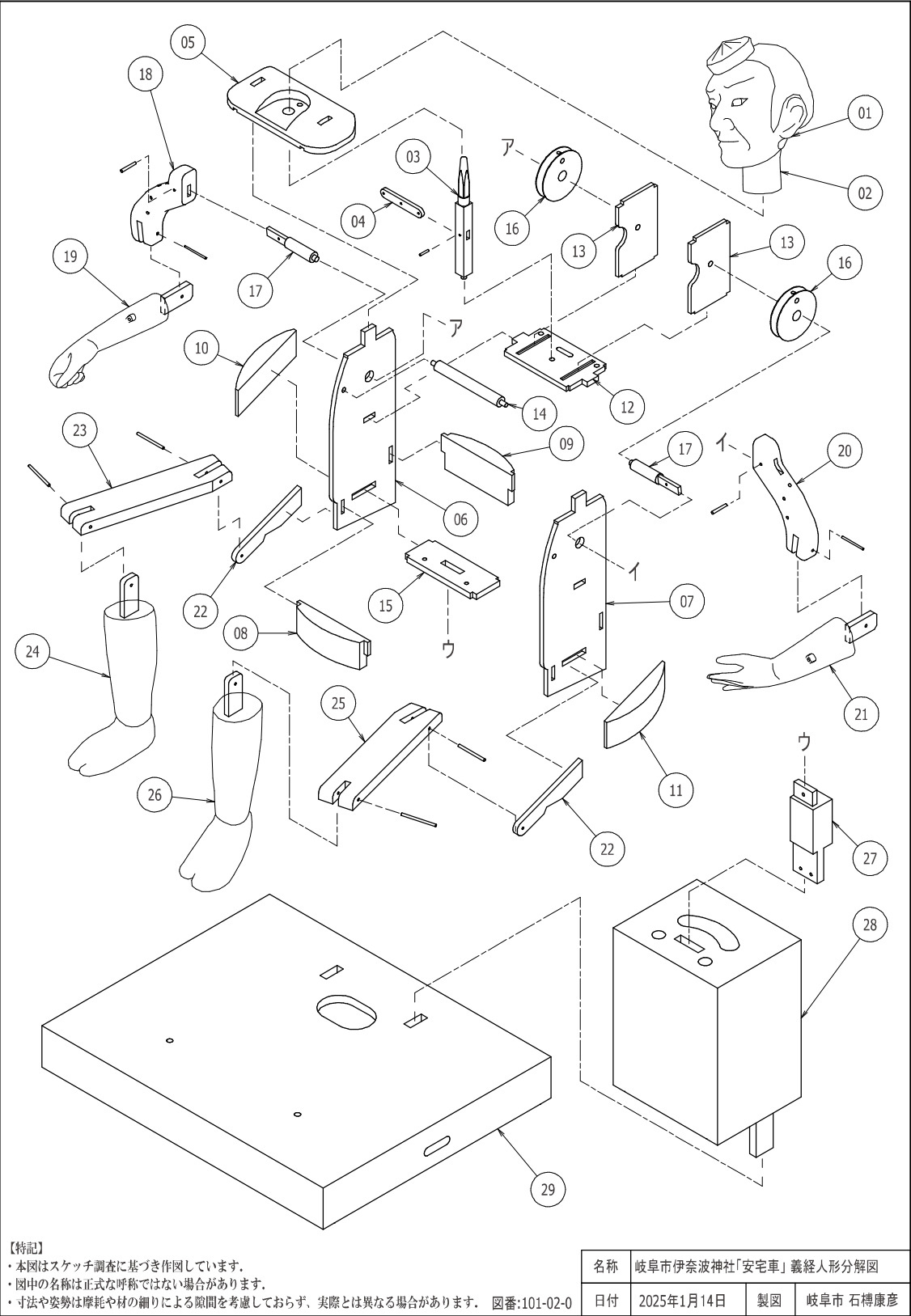


写真 5-8 構造

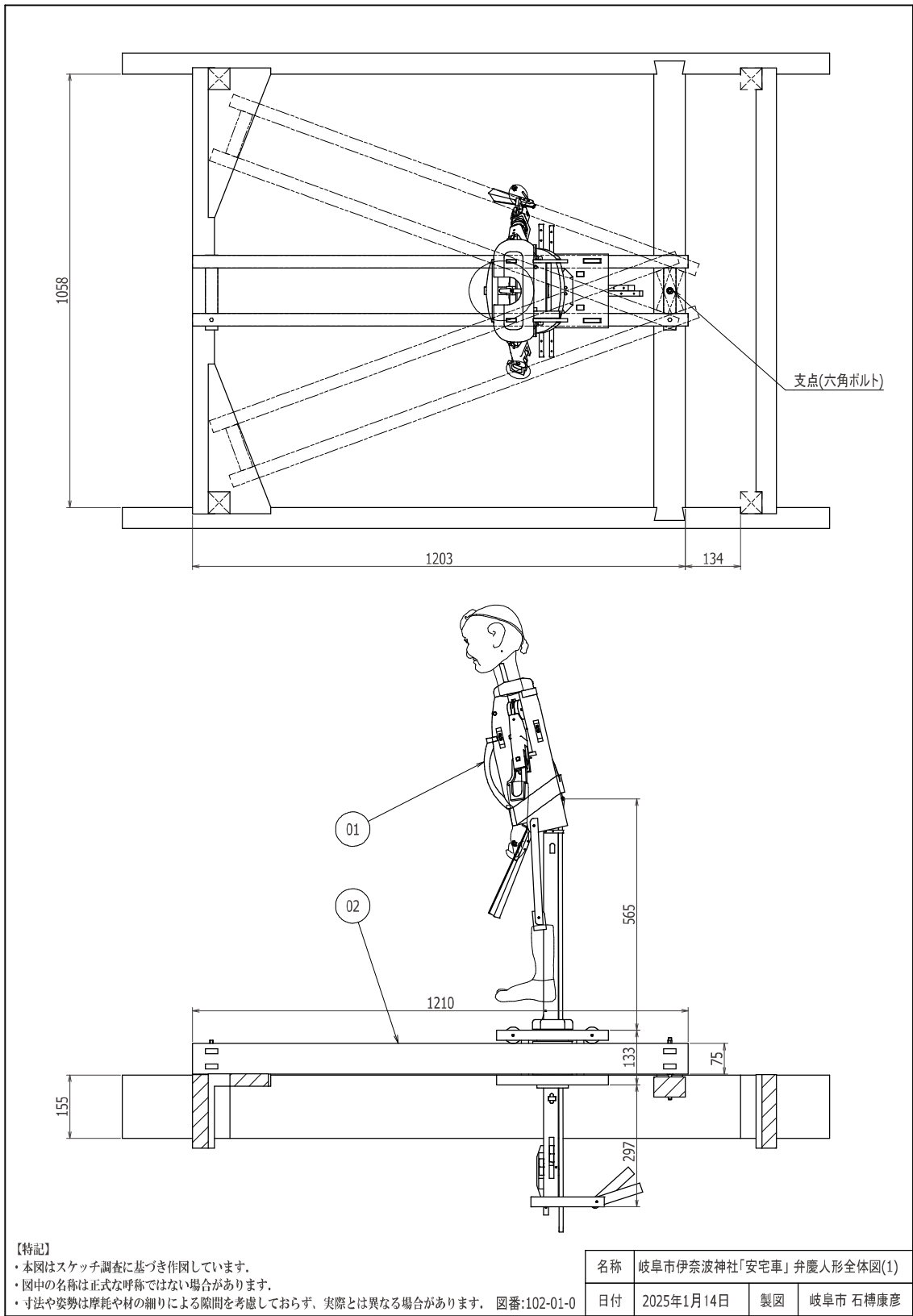


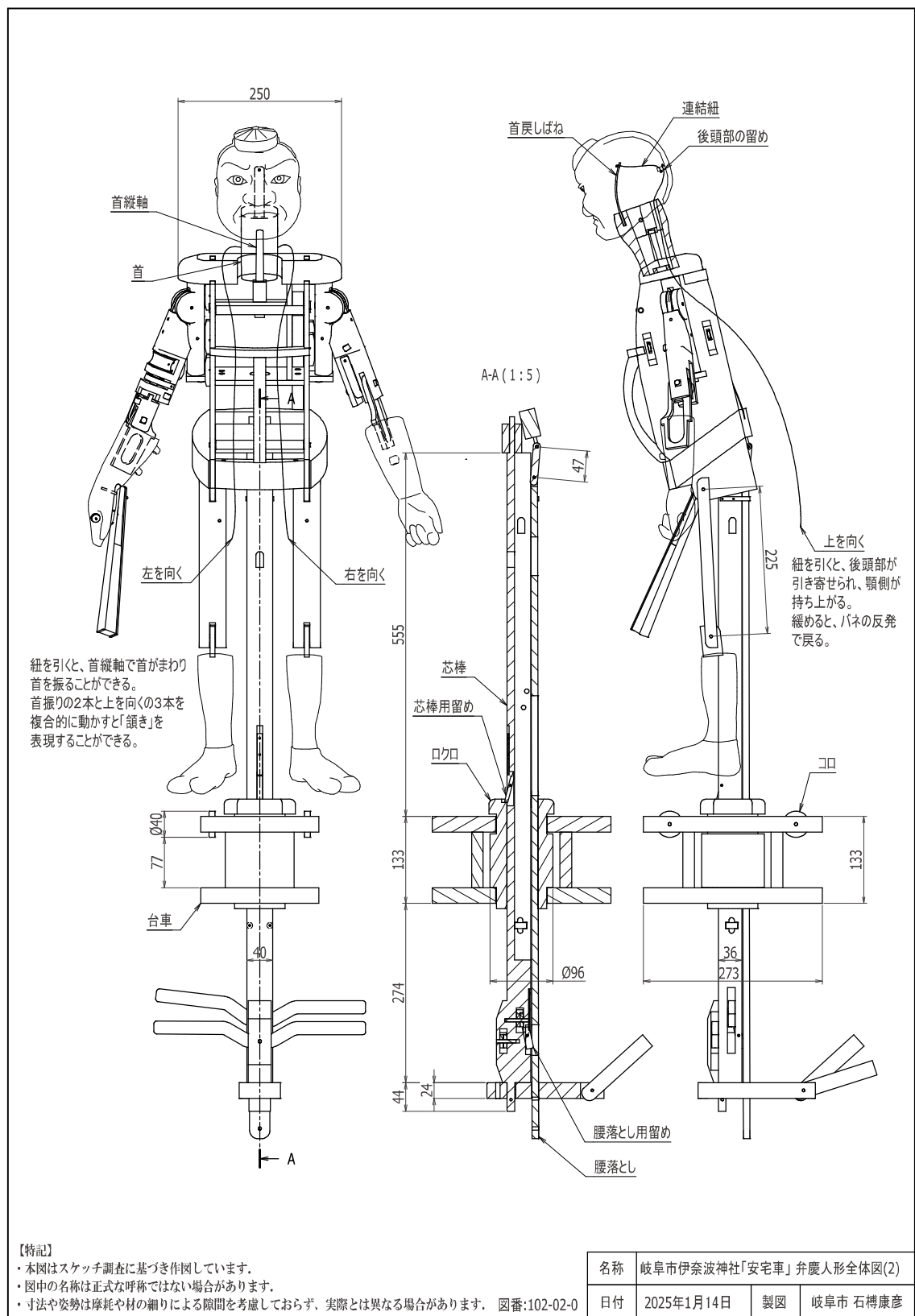
(二) 記録図面

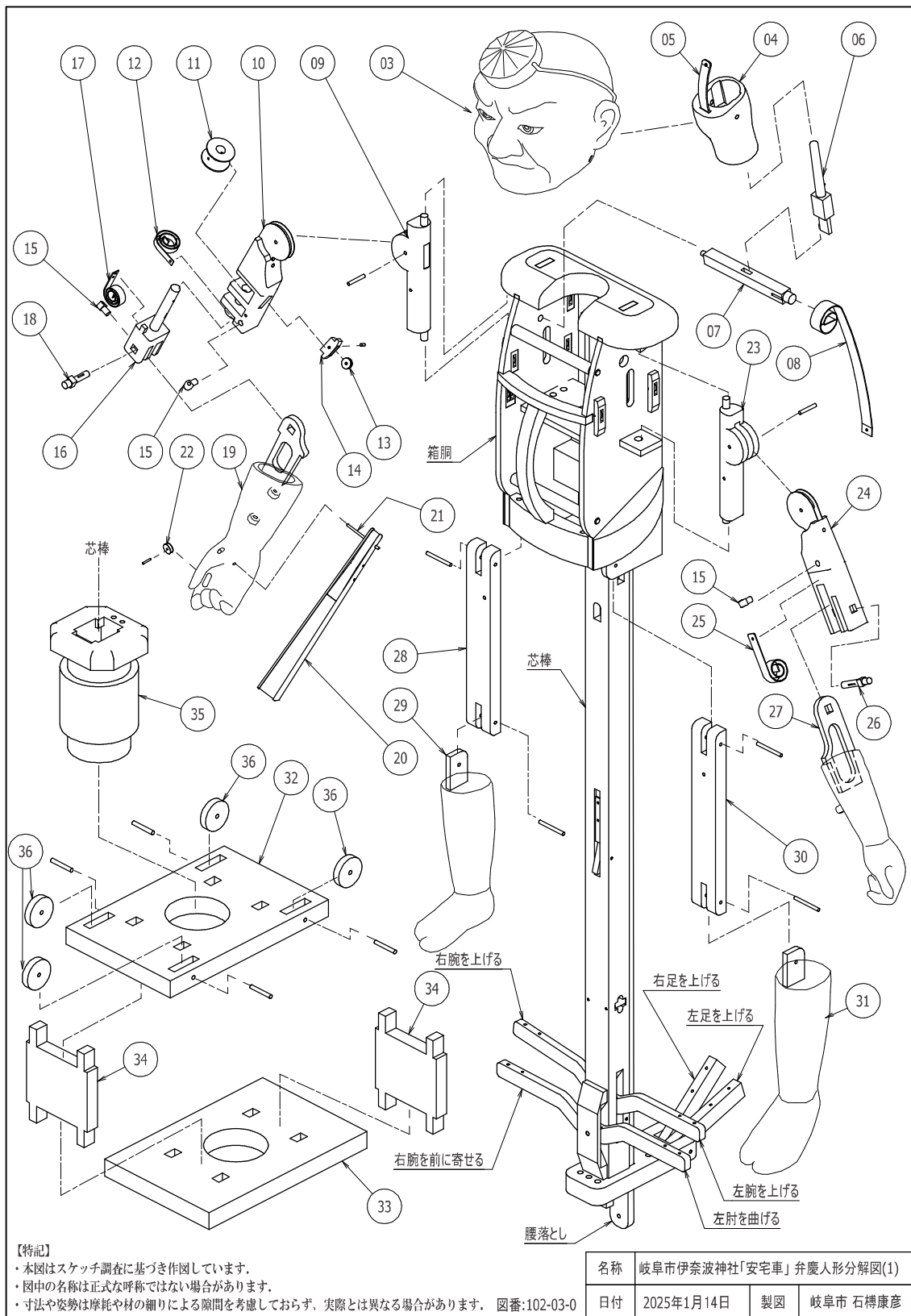
1 安宅車

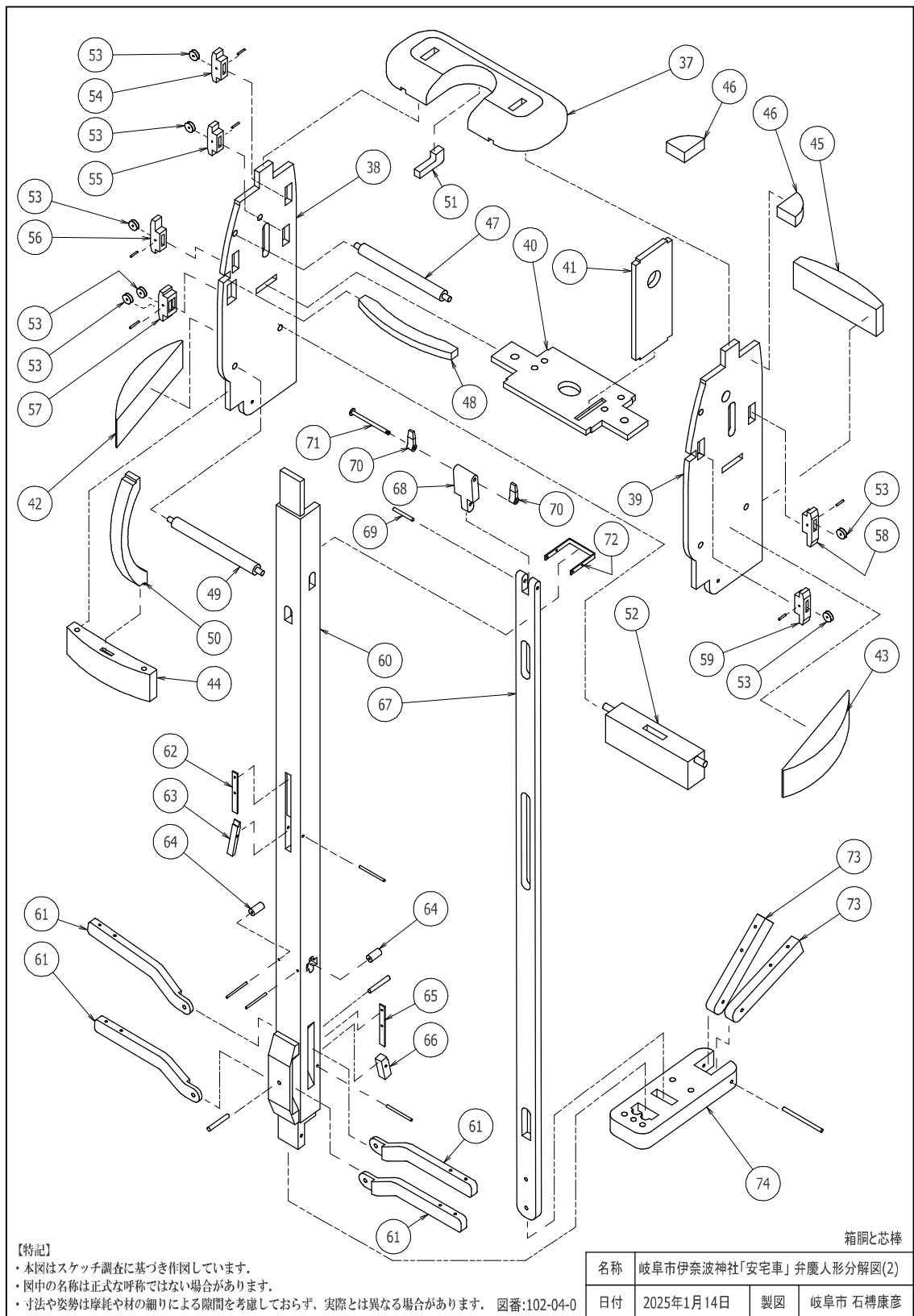


[illegible]





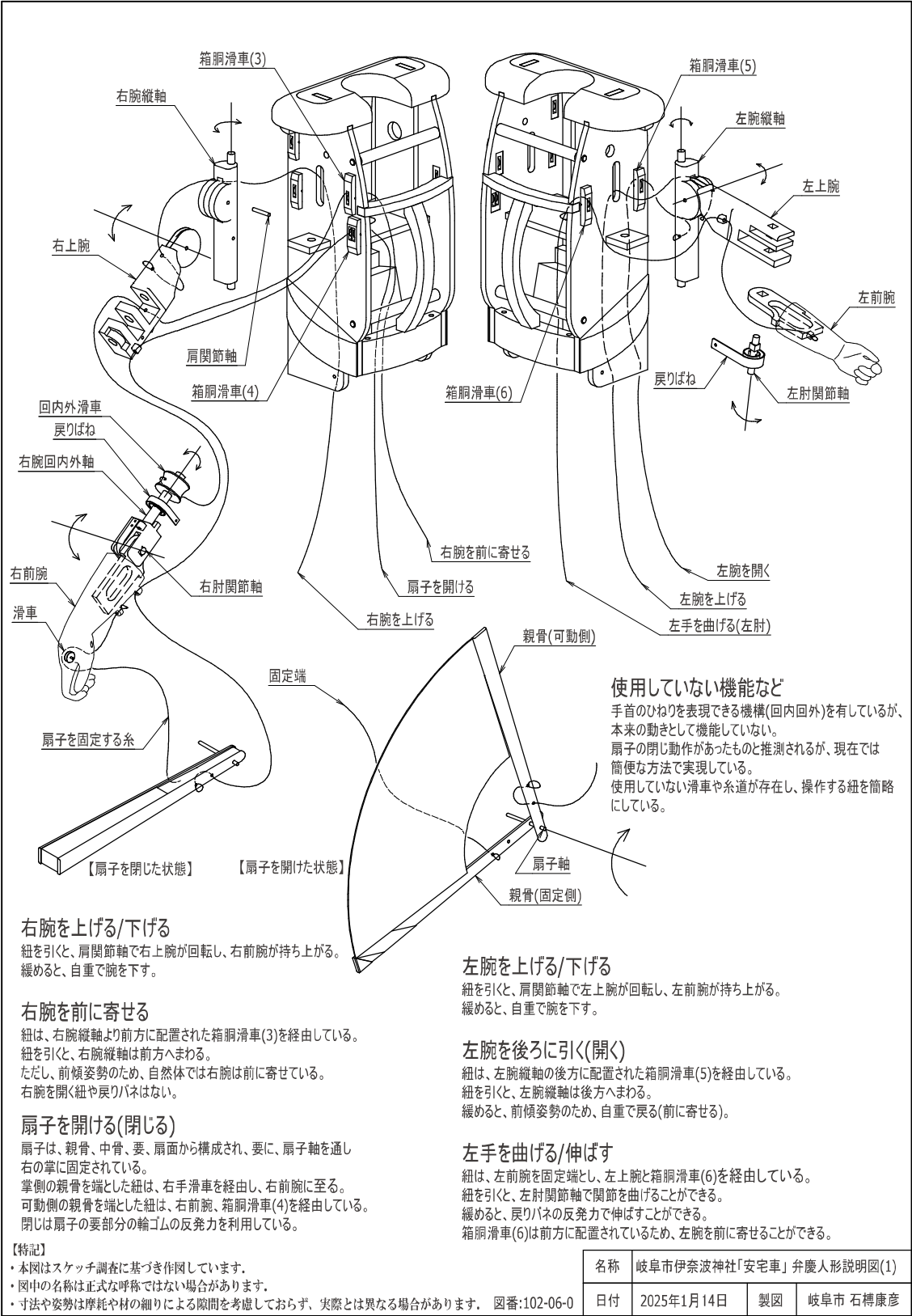


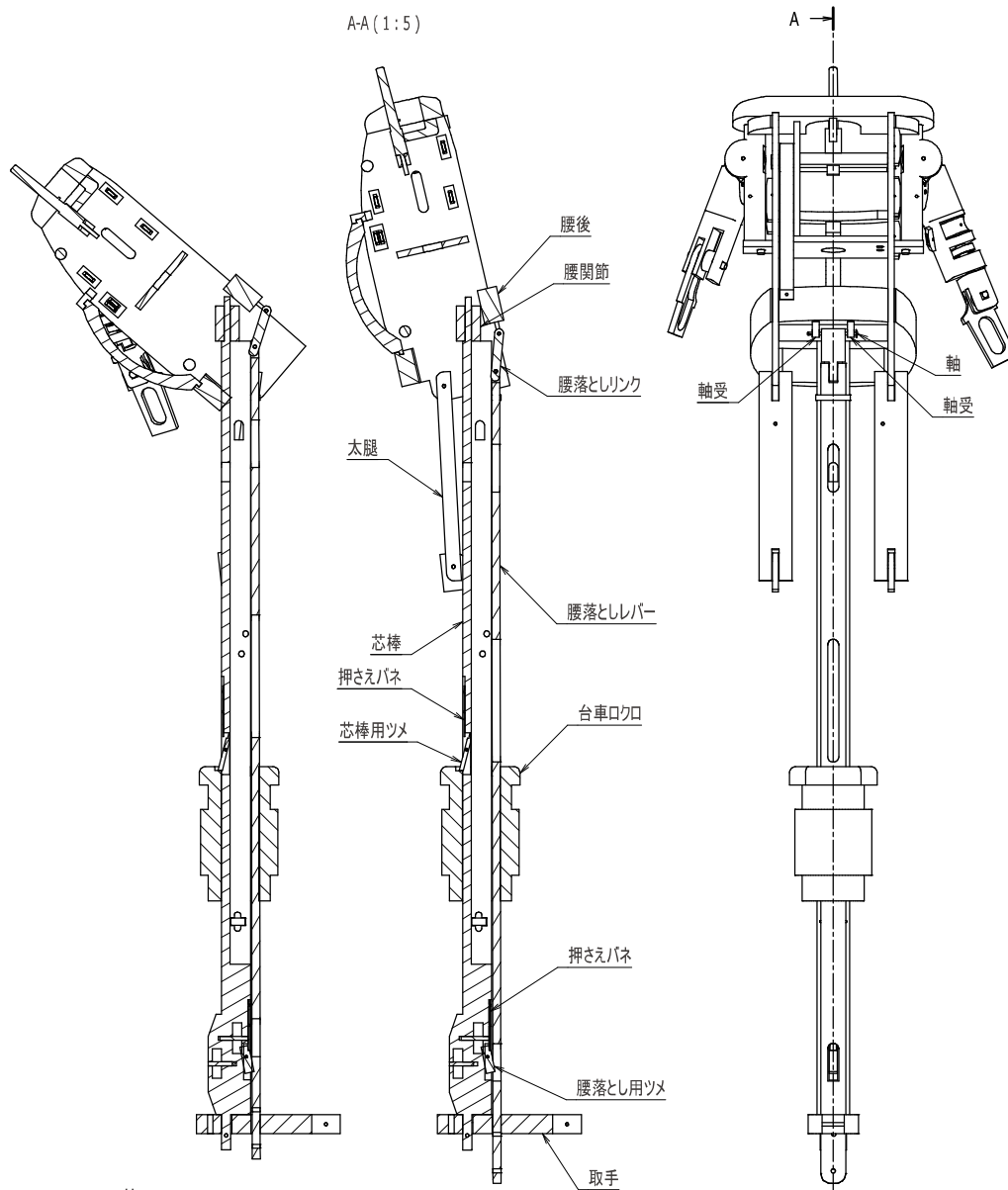




安宅車 弁慶人形 部品表(1)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
01	弁慶人形	1		
02	樋	1	木質	
03	頭	1	木質	
04	首	1	木質	
05	首戻しばね	1	鯨ヒゲ	
06	首縦軸	1	木質	
07	首横軸	1	木質	
08	首軸戻しばね	1	鋼材	
09	右腕縦軸	1	木質	
10	右上腕	1	木質	
11	右腕滑車	1	木質	
12	右腕戻しばね	1	鋼材	
13	右腕滑車	1	木質	
14	右腕滑車台	1	木質	
15	糸道	3	木質	
16	右前腕	1	木質	
17	右手戻しばね	1	鋼材	
18	右肘軸	1	木質	
19	右手	1	木質	
20	扇子	1	木質、真鍮	
21	扇子固定軸	1	真鍮	
22	右手滑車	1	木質	
23	左腕縦軸	1	木質	
24	左上腕	1	木質	
25	左手戻しばね	1	鋼材	
26	左肘軸	1	木質	
27	左手	1	木質	
28	右太腿	1	木質	
29	右足	1	木質	
30	左太腿	1	木質	
31	左足	1	木質	
32	台車上板	1	木質	
33	台車下板	1	木質	
34	台車立て板	2	木質	
35	台車口口	1	木質	
36	台車口口	4	木質	
37	肩板	1	木質	
38	右側板	1	木質	
39	左側板	1	木質	
40	中板	1	木質	

安宅車 弁慶人形 部品表(2)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
41	中縦板	1	木質	
42	腰右	1	木質	
43	腰左	1	木質	
44	腰前	1	木質	
45	腰後	1	木質	
46	腕制限	2	木質	
47	胸棒	1	木質	
48	胸枠	1	木質	
49	腰前棒	1	木質	
50	胸当て	1	木質	
51	首当て	1	木質	
52	腰関節	1	木質	
53	箱胴滑車	7	木質	
54	箱胴滑車台(1)	1	木質	
55	箱胴滑車台(2)	1	木質	
56	箱胴滑車台(3)	1	木質	
57	箱胴滑車台(4)	1	木質	
58	箱胴滑車台(5)	1	木質	
59	箱胴滑車台(6)	1	木質	
60	芯棒	1	木質	
61	操作レバー	4	木質	
62	押さえバネ	1	鋼材	
63	芯棒用ツメ	1	木質	
64	糸口口	2	木質	
65	押さえバネ	1	鋼材	
66	腰落とし用ツメ	1	木質	
67	腰落としレバー	1	木質	
68	腰落としリンク	1	木質	
69	腰落とし軸	1	真鍮	
70	軸受	2	鋼材	
71	軸	1	真鍮	
72	枠	1	真鍮	
73	操作レバー	2	木質	
74	取手	1	木質	
	ピン、木ねじ、フェルト			

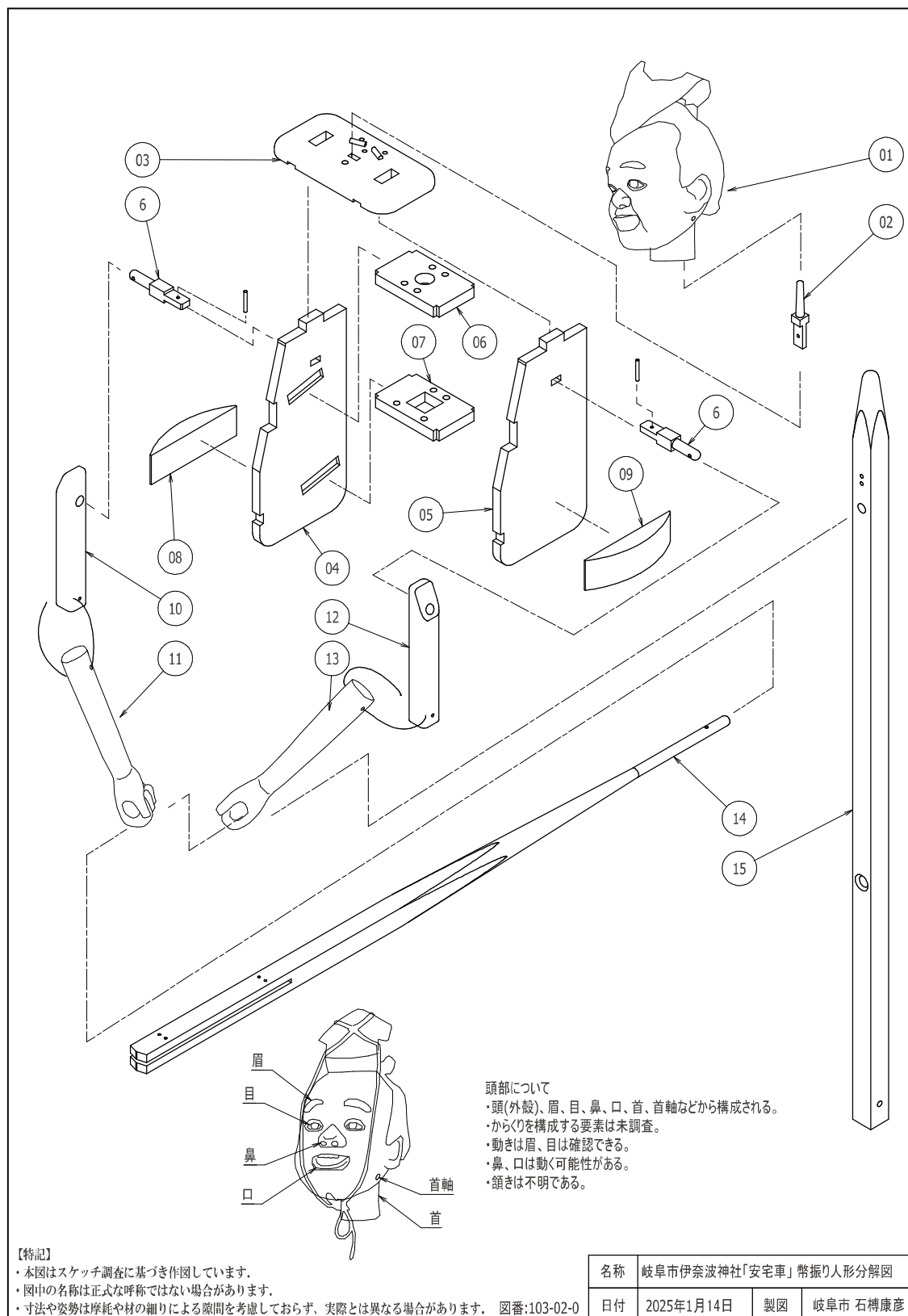




腰落とし
ツメを解除し腰落としレバーを上押し上げると、腰関節を中心に腰後が持ち上げられ、腰を折ることができる。重心が前方(胸側)にあるため、腰落とし用ツメを解除すると勢いよく動く。
腰落としリンクや軸受部分には過大な負担がかかり補修、補強が見受けられる。

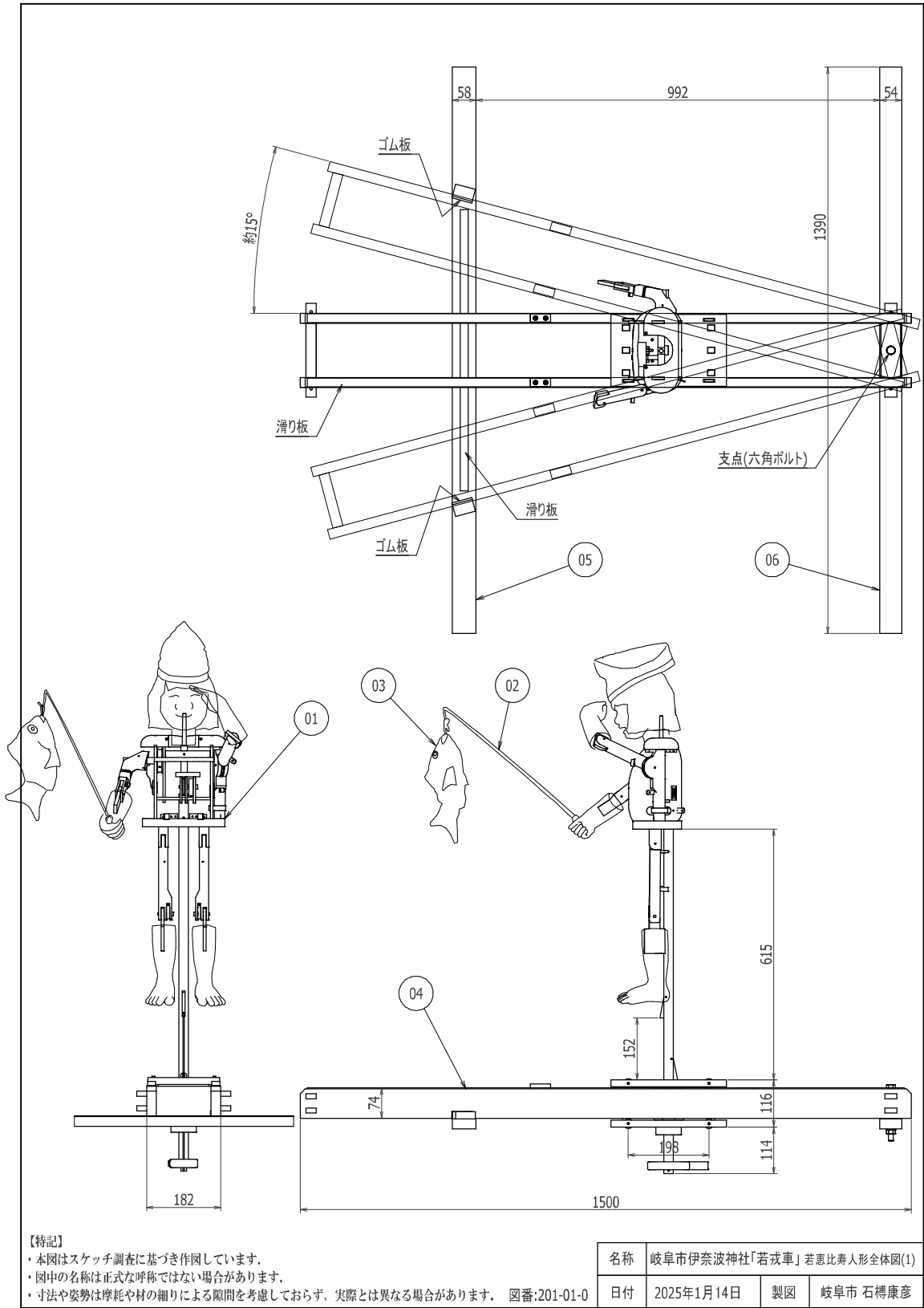
- 【特記】
- 本図はスケッチ調査に基づき作図しています。
 - 図中の名称は正式な呼称ではない場合があります。
 - 寸法や姿勢は摩耗や材の細りによる隙間を考慮しておらず、実際とは異なる場合があります。 図番:102-07-0

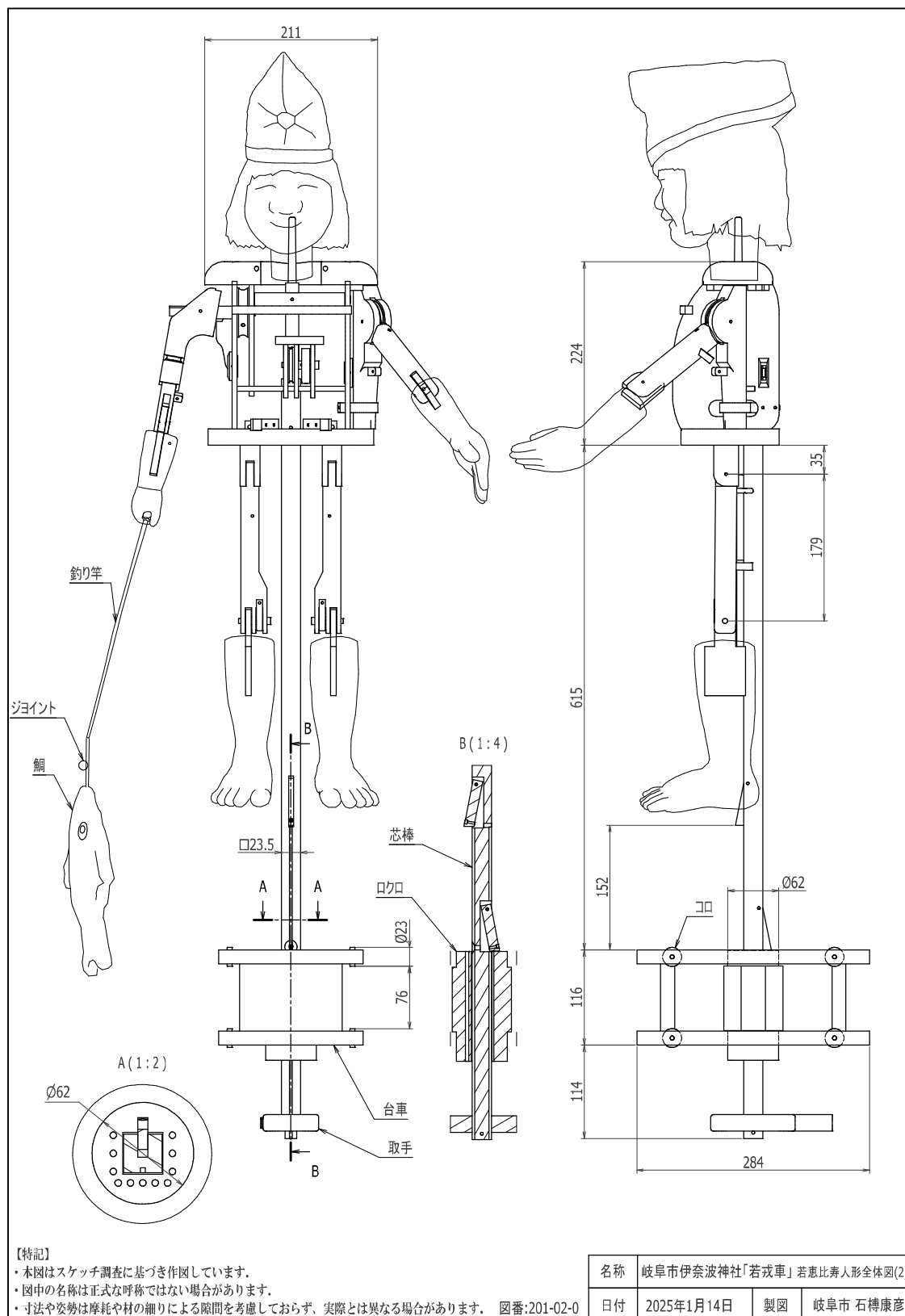
名称	岐阜市伊奈波神社「安宅車」弁慶人形説明図(2)		
日付	2025年1月14日	製図	岐阜市 石樽康彦

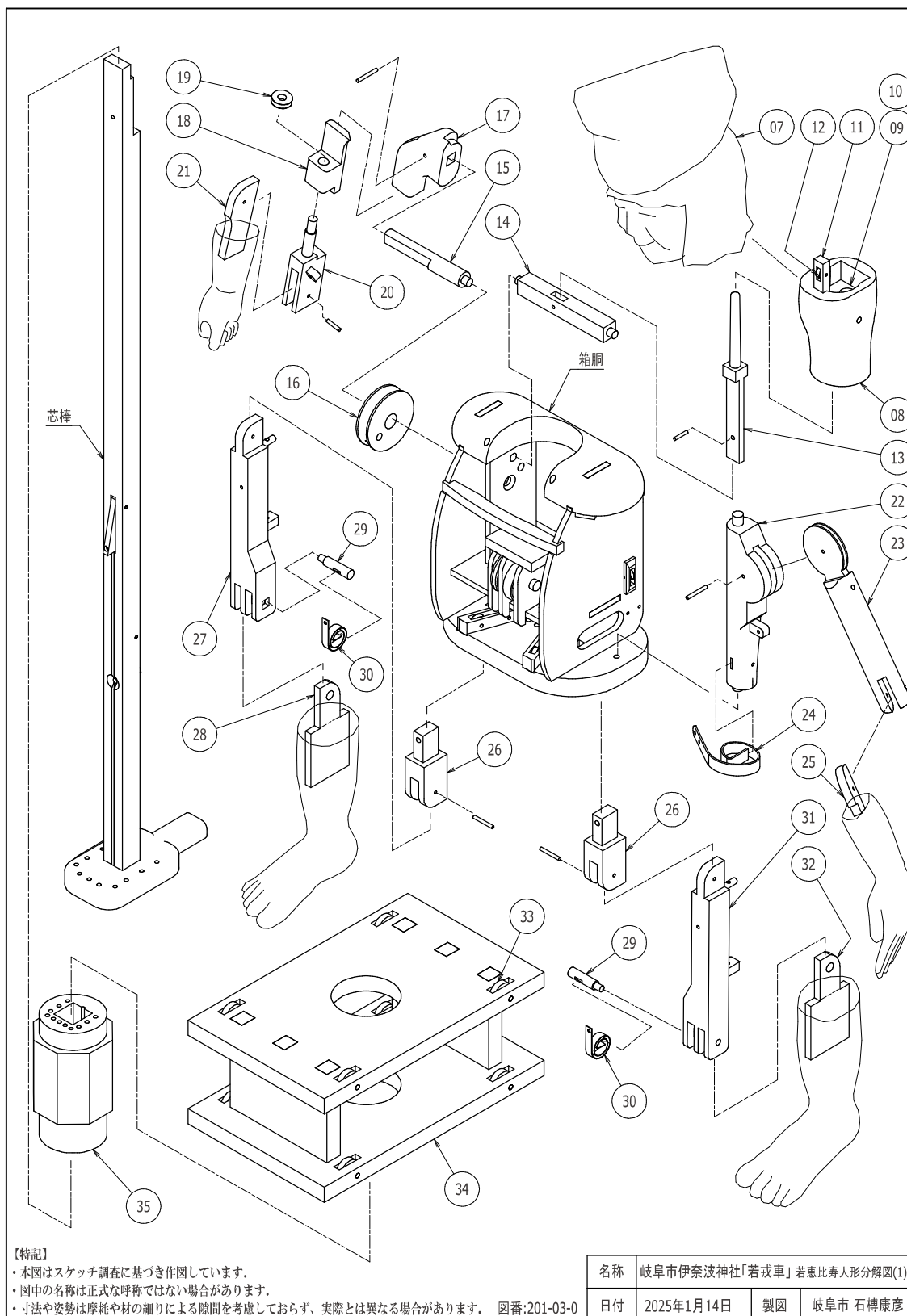


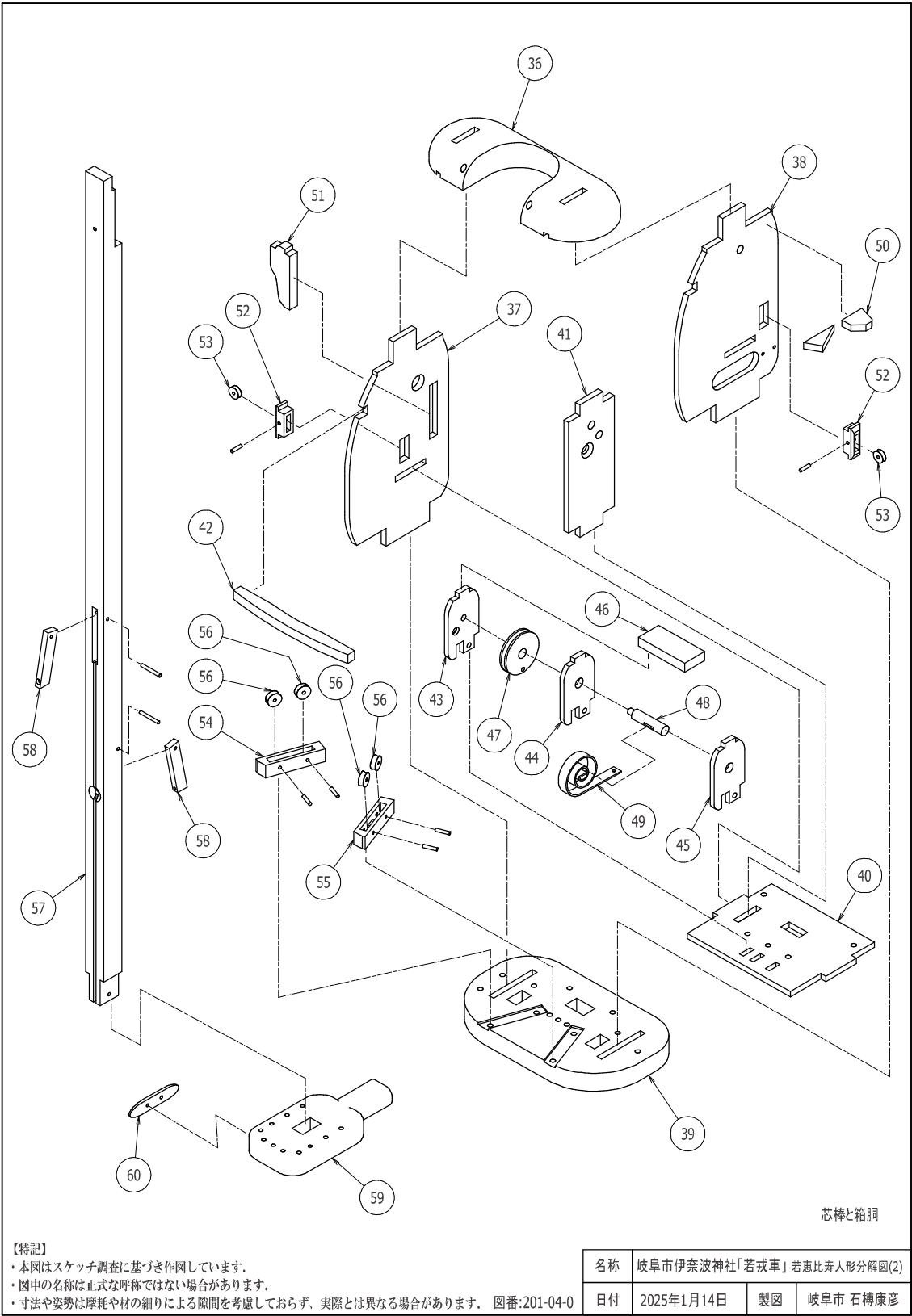
[illegible]

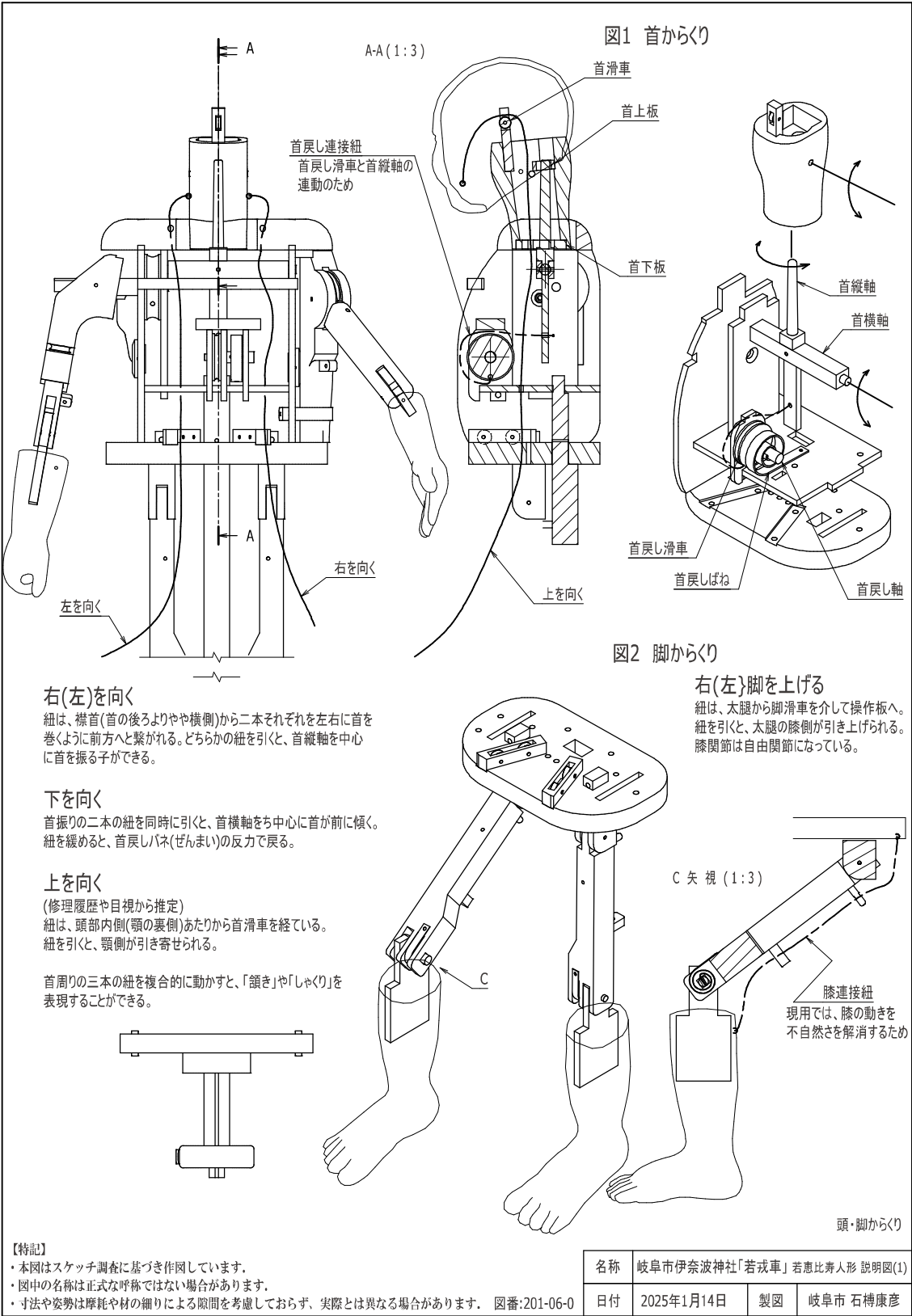
2 若戎車

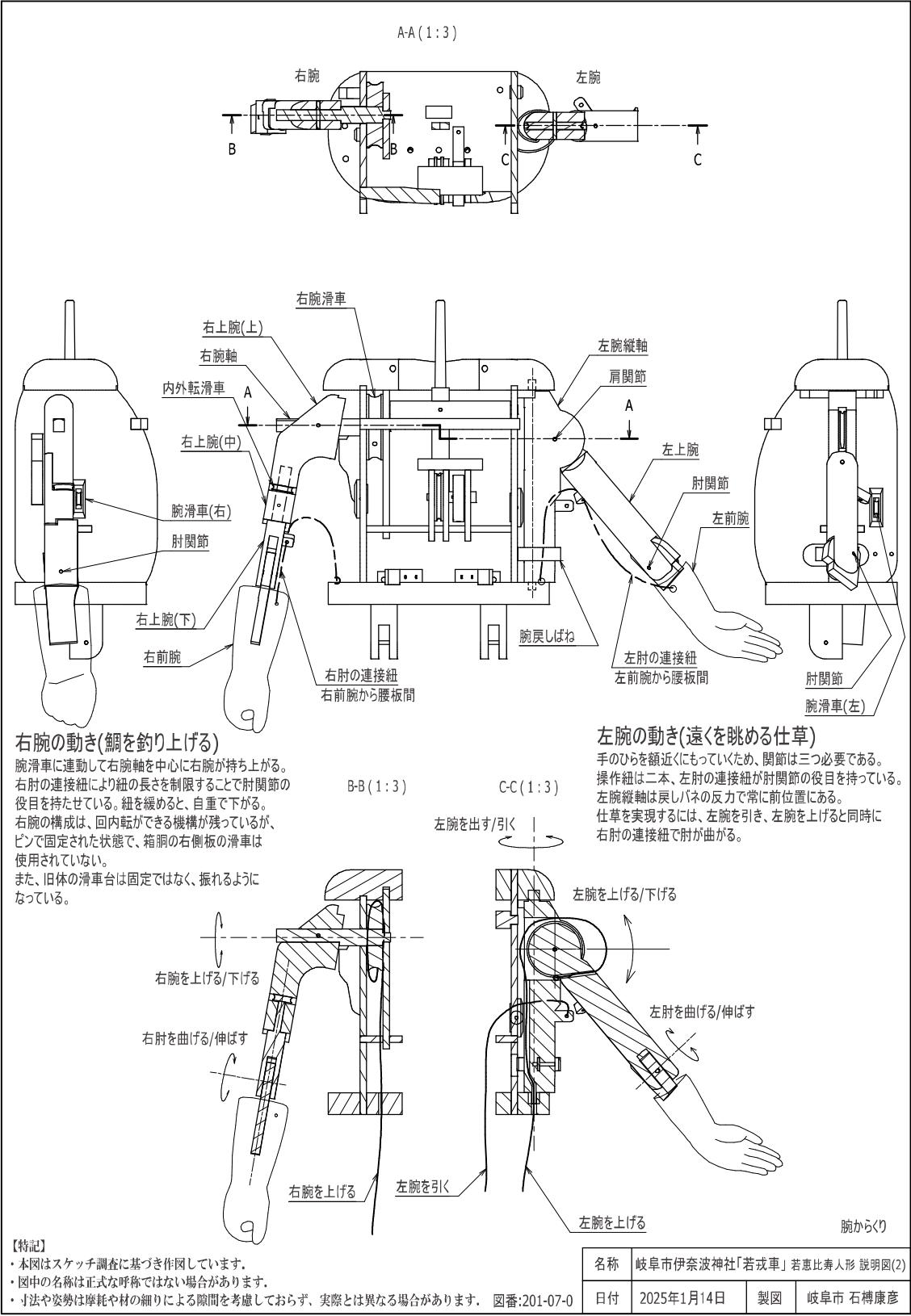


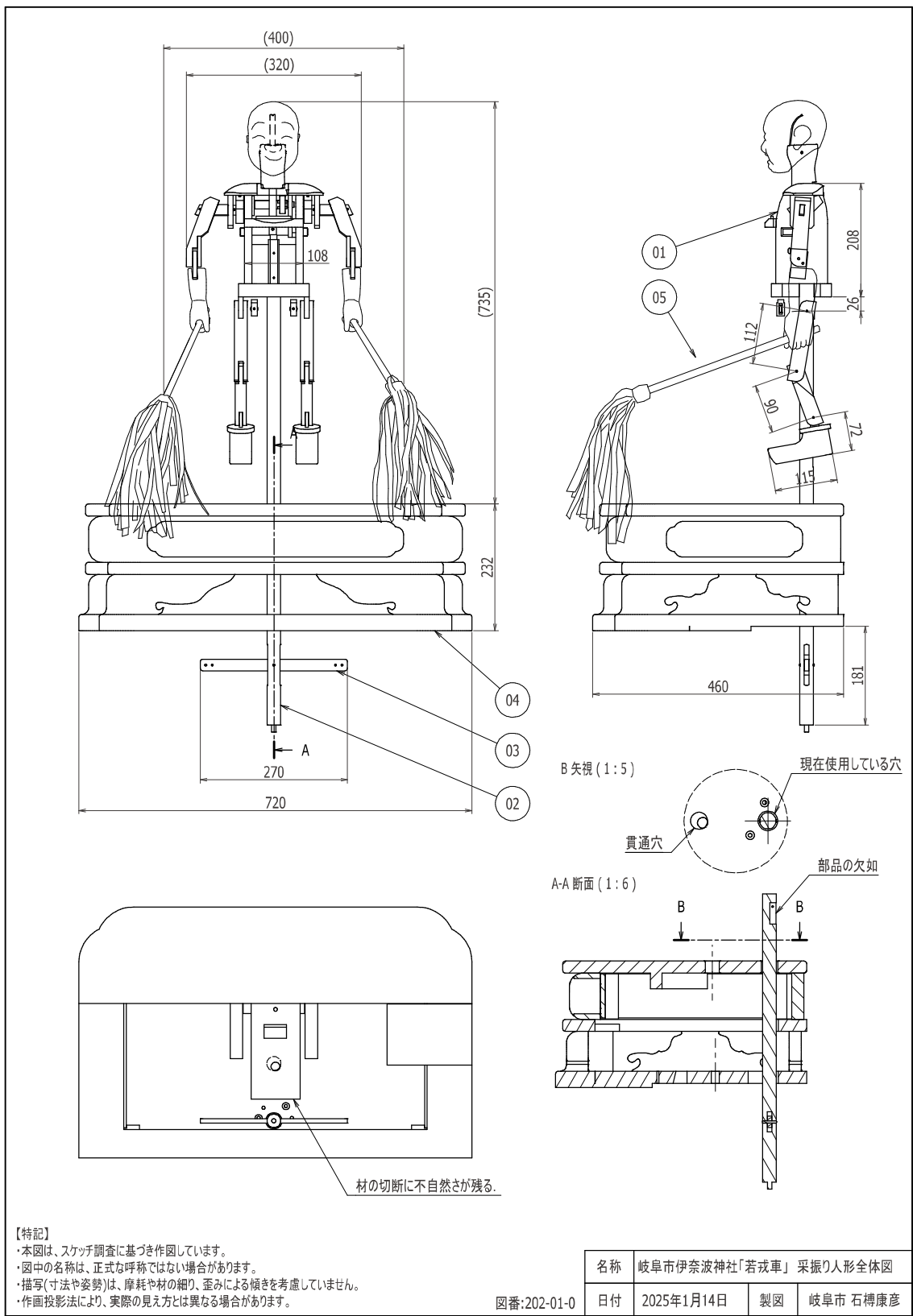


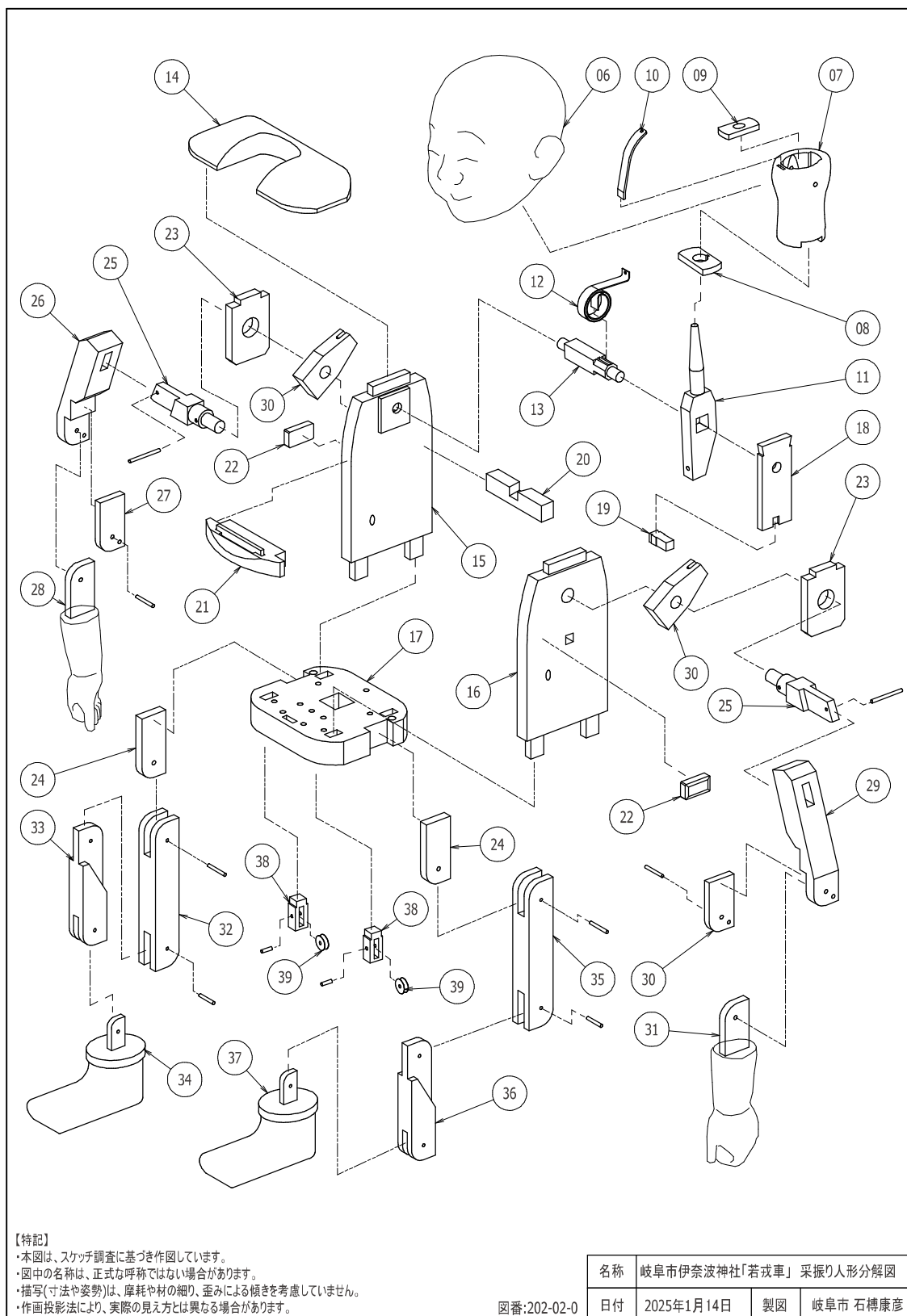






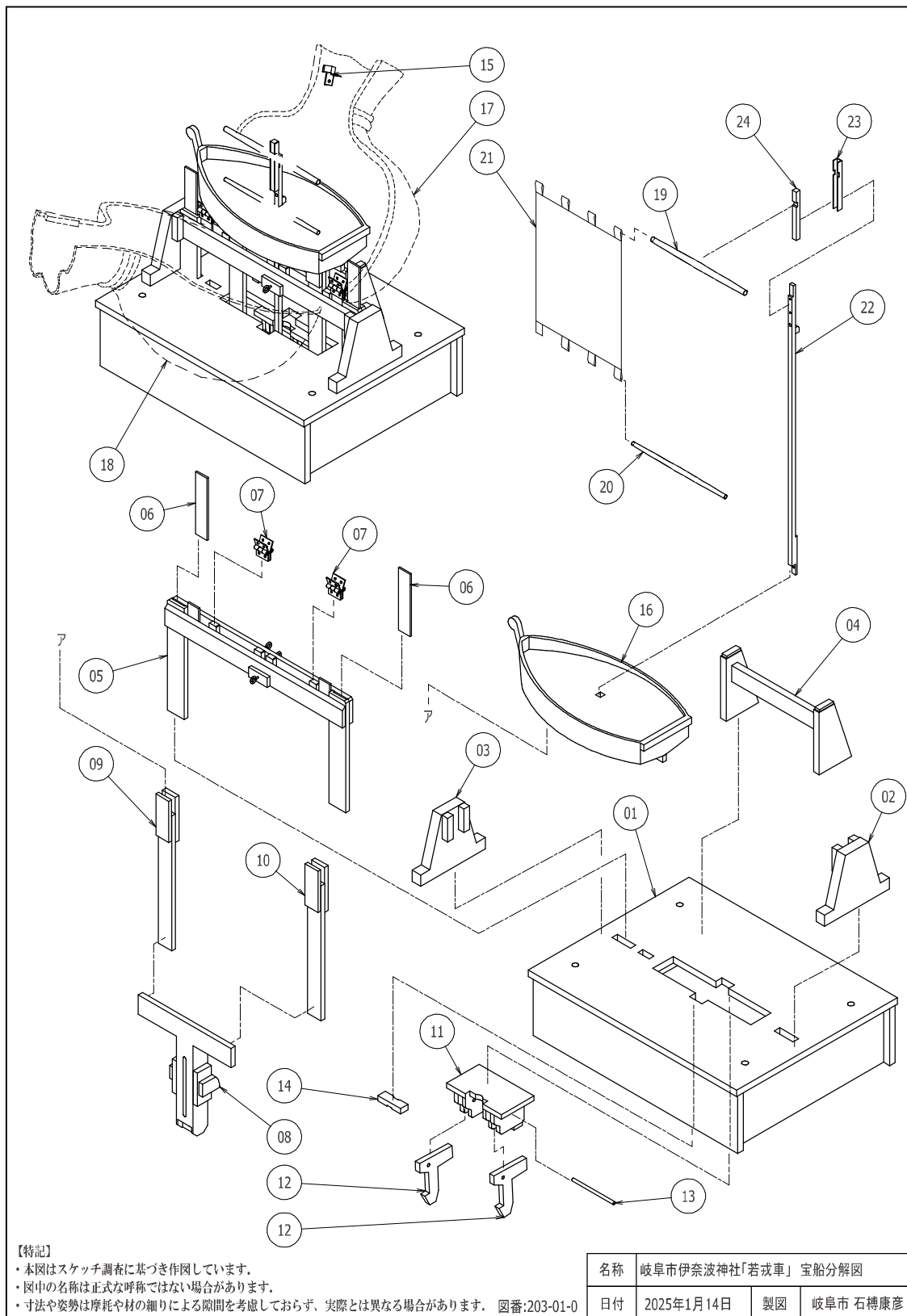






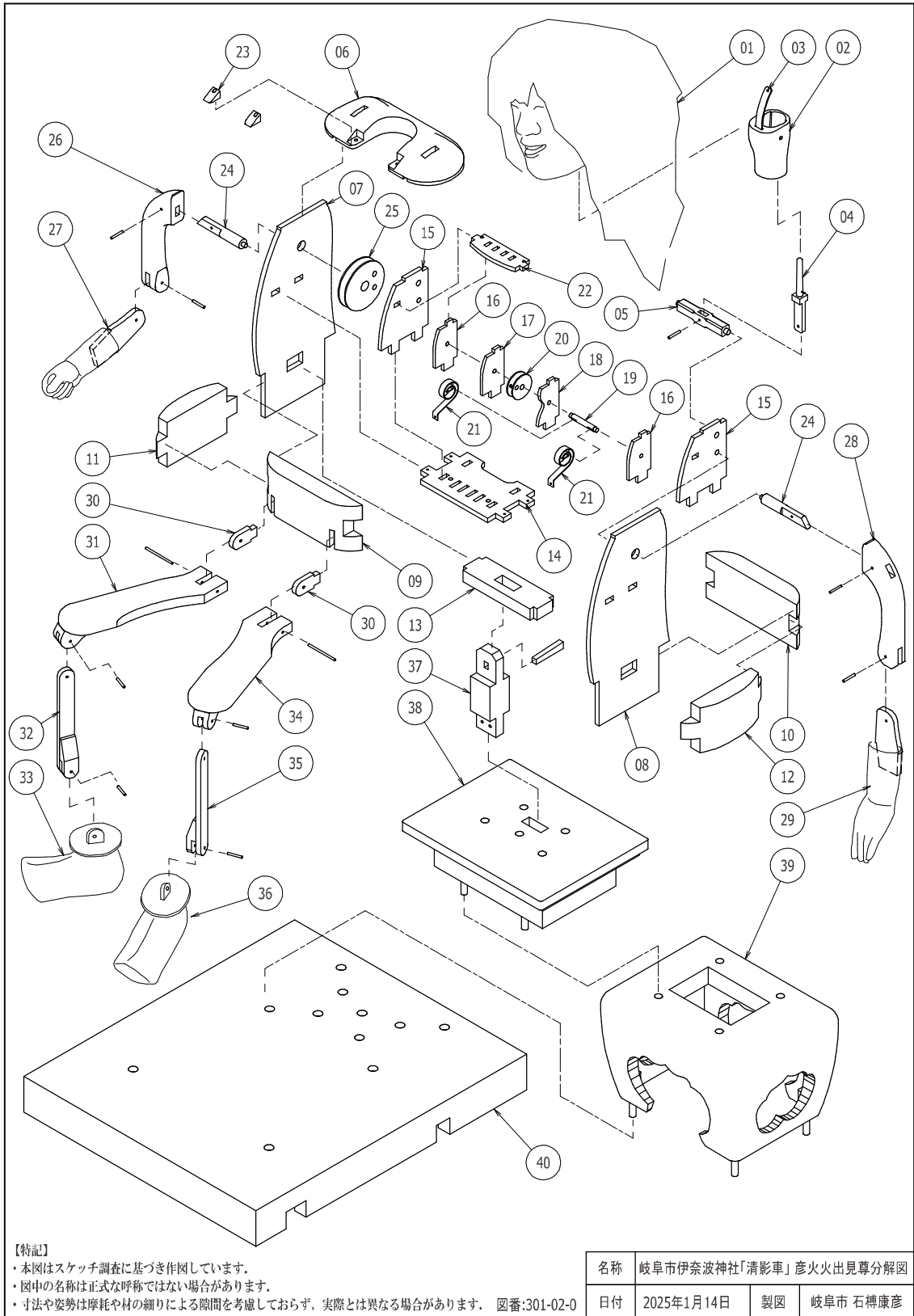


若戎車 采振り人形 部品表				
見出し番号	名称	数量	材質	備考
01	采振り人形	1	木質	
02	芯棒	1	木質	
03	操作板	1	木質	
04	台座	1	木質	
05	采	2	木質・紙	
06	頭	1	木質	
07	首	1	木質	
08	首下板	1	木質	
09	首上板	1	木質	
10	戻しばね	1	鯨ヒゲ	
11	首縦軸	1	木質	
12	ぜんまい	1	鋼材	
13	首横軸	1	木質	
14	肩板	1	木質	
15	箱胴右側板	1	木質	
16	箱胴左側板	1	木質	
17	腰板	1	木質	
18	箱胴中板	1	木質	
19	箱胴中板留め	1	木質	
20	箱胴背板	1	木質	
21	箱胴糸通し	1	木質	
22	腕留め	2	木質	
23	腕軸受け板	2	木質	
24	股関節板	2	木質	
25	腕軸	2	木質	
26	右上腕	1	木質	
27	右肘板	1	木質	
28	右前腕	1	木質	
29	左上腕	1	木質	
30	左肘板	1	木質	
31	左前腕	1	木質	
32	右太腿	1	木質	
33	右下腿	1	木質	
34	右足	1	木質	
35	左太腿	1	木質	
36	左下腿	1	木質	
37	左足	1	木質	
38	脚滑車台	2	木質	
39	脚滑車	2	木質	
	ピン類	多数		



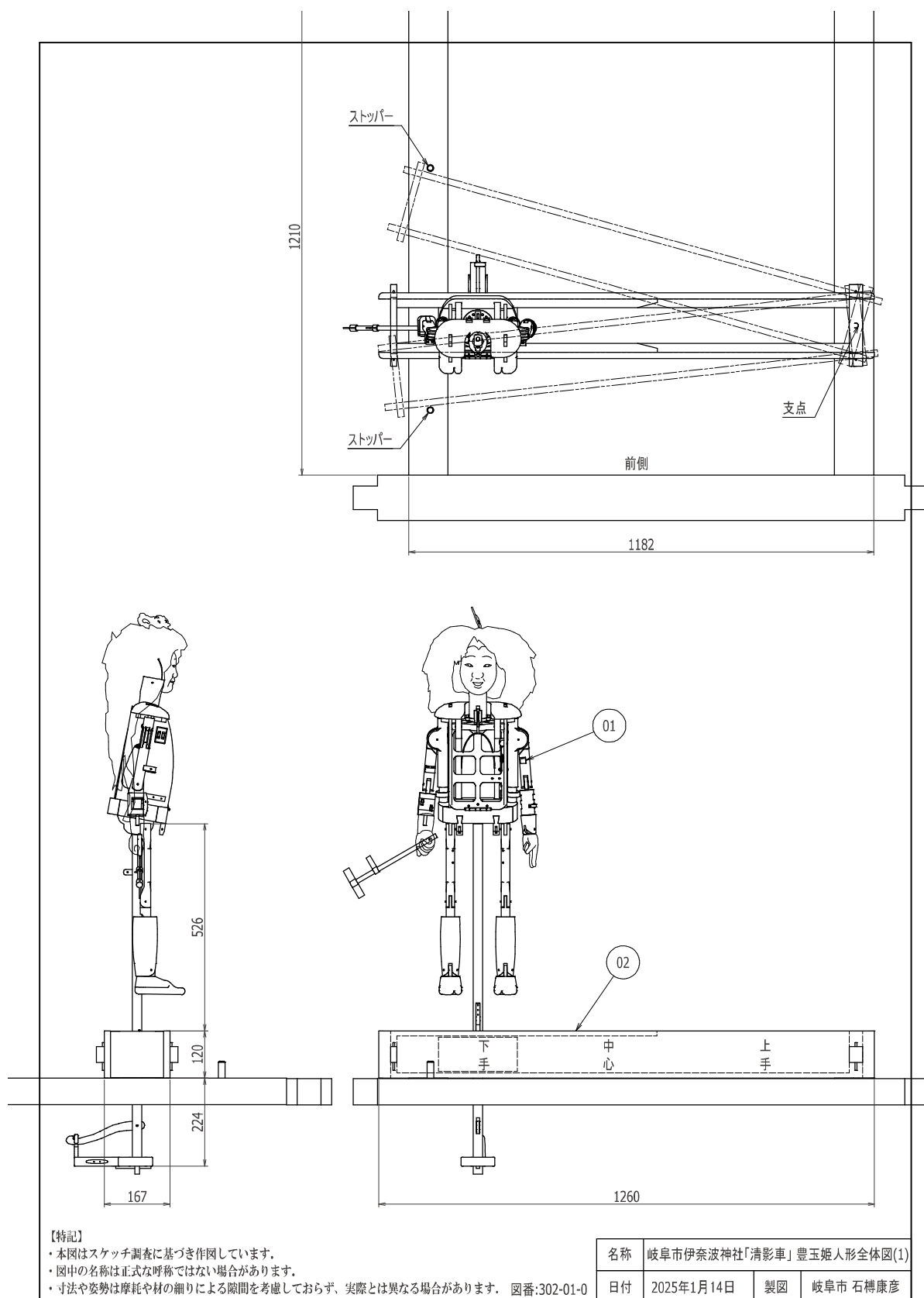
ピン・木ねじ・クッションゴム

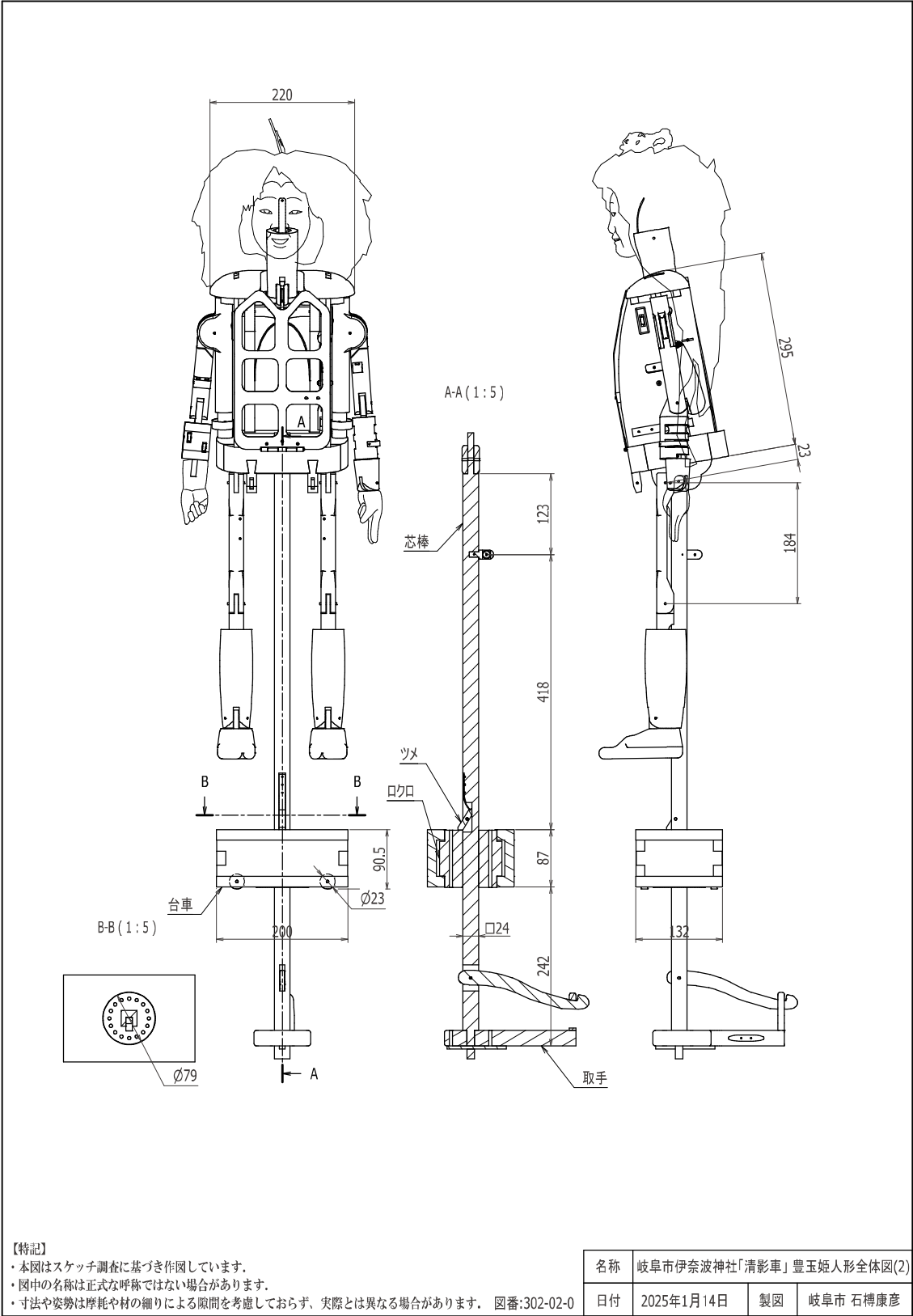
3 清影車

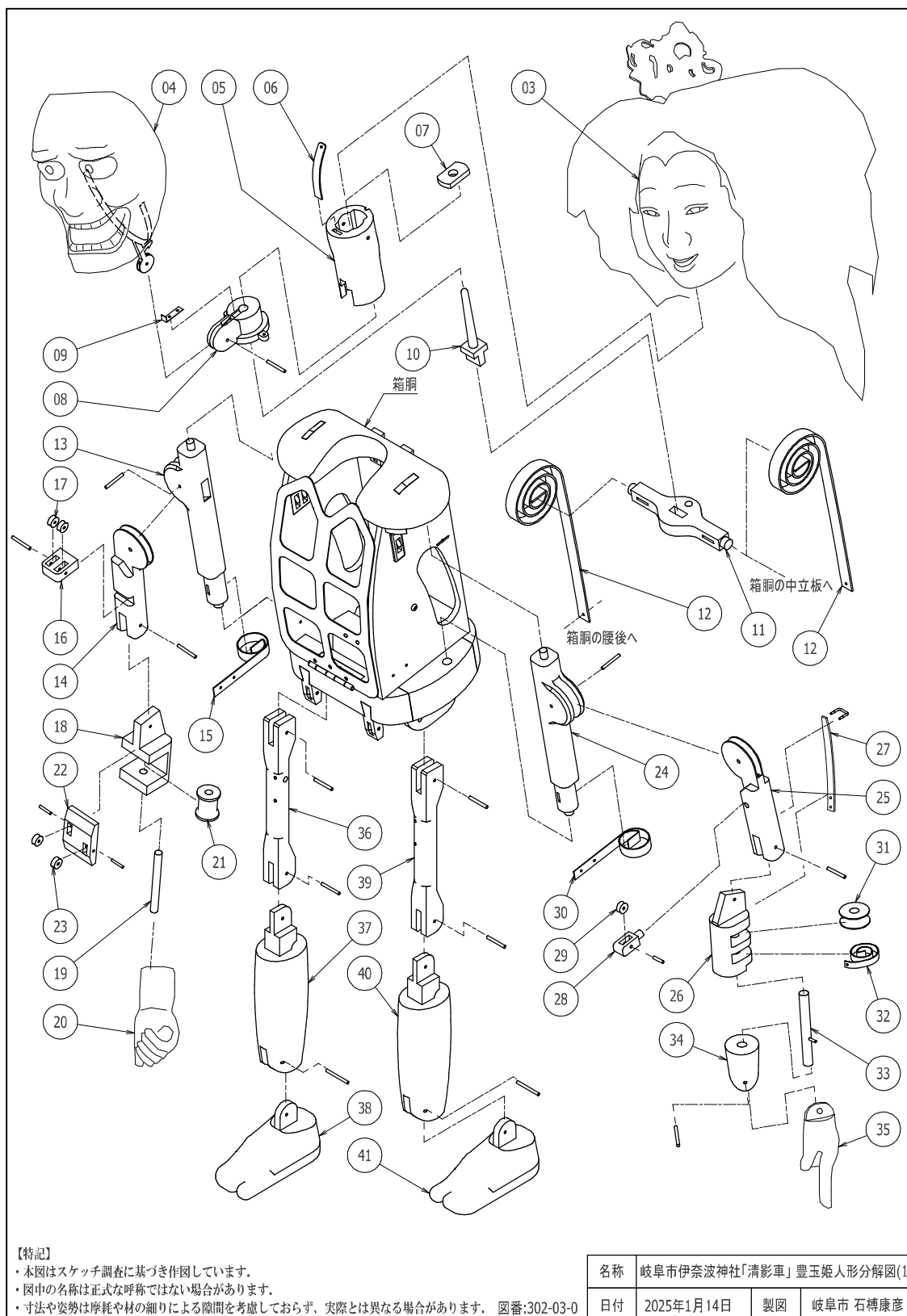


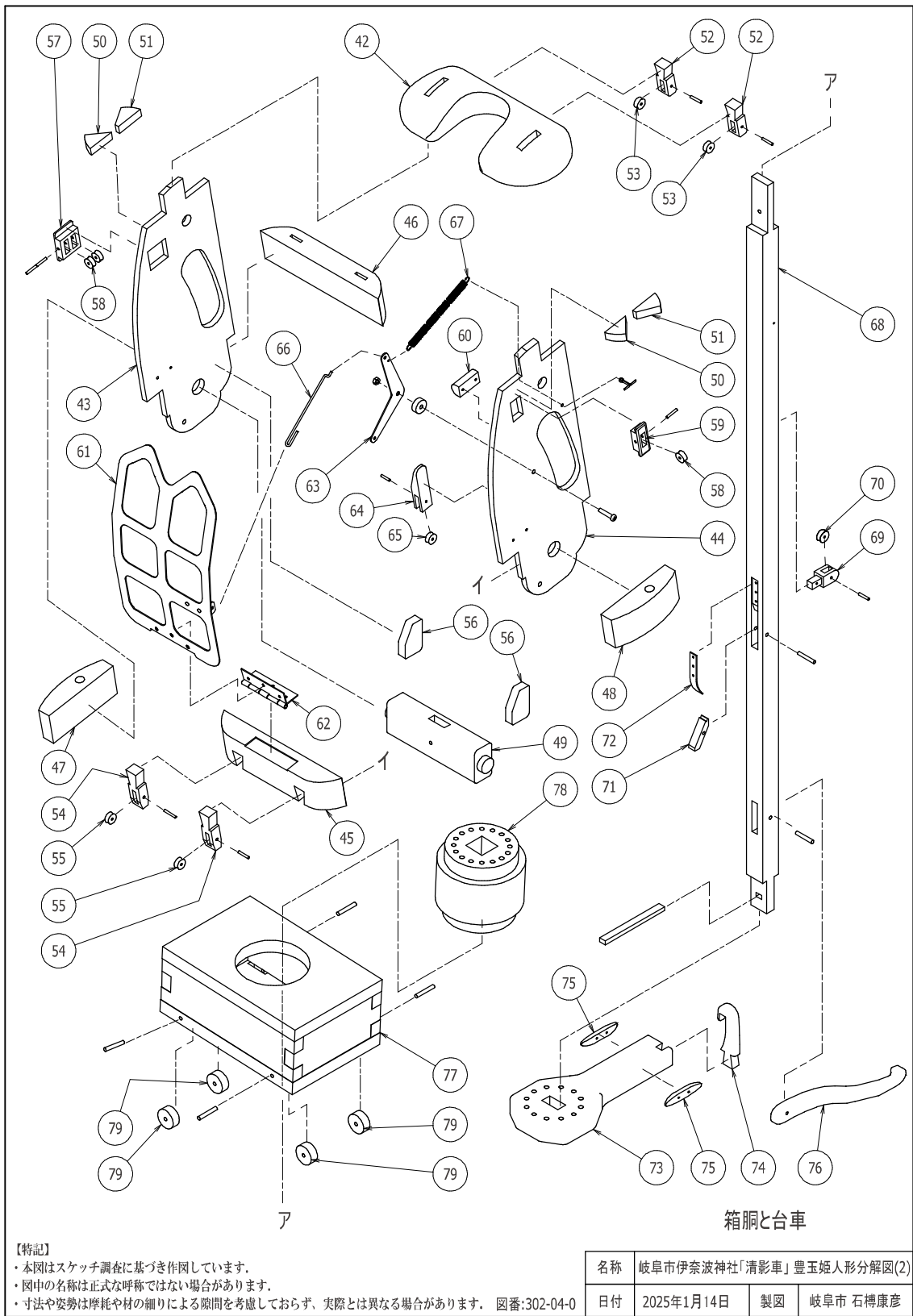


清影車 彦火火出見尊 部品表(1)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
01	頭	1	木質	
02	首	1	木質	
03	首戻しばね	1	鯨ヒゲ	
04	首縦軸	1	木質	
05	首横軸	1	木質	
06	肩板	1	木質	
07	右側板	1	木質	
08	左側板	1	木質	
09	腰前	1	木質	
10	腰後	1	木質	
11	腰右	1	木質	
12	腰左	1	木質	
13	腰板	1	木質	
14	中板	1	木質	
15	中立板	2	木質	
16	仕切り板A	2	木質	
17	仕切り板B	1	木質	
18	仕切り板C	1	木質	
19	頭戻し軸	1	木質	
20	頭戻し滑車	1	木質	
21	頭戻しばね	2	鯨ヒゲ	
22	仕切り上板	1	木質	
23	糸道	1	木質	
24	腕軸	2	木質	
25	腕滑車	1	木質	
26	右上腕	1	木質	
27	右前腕	1	木質	
28	左上腕	1	木質	
29	左前腕	1	木質	
30	股関節板	2	木質	
31	右太腿	1	木質	
32	右下腿	1	木質	
33	右足	1	木質	
34	左太腿	1	木質	
35	左下腿	1	木質	
36	左足	1	木質	
37	支柱	1	木質	
38	腰掛板	1	木質	
39	腰掛	1	木質	
40	台座	1	木質	
	ピン、木ねじ、フェルト			



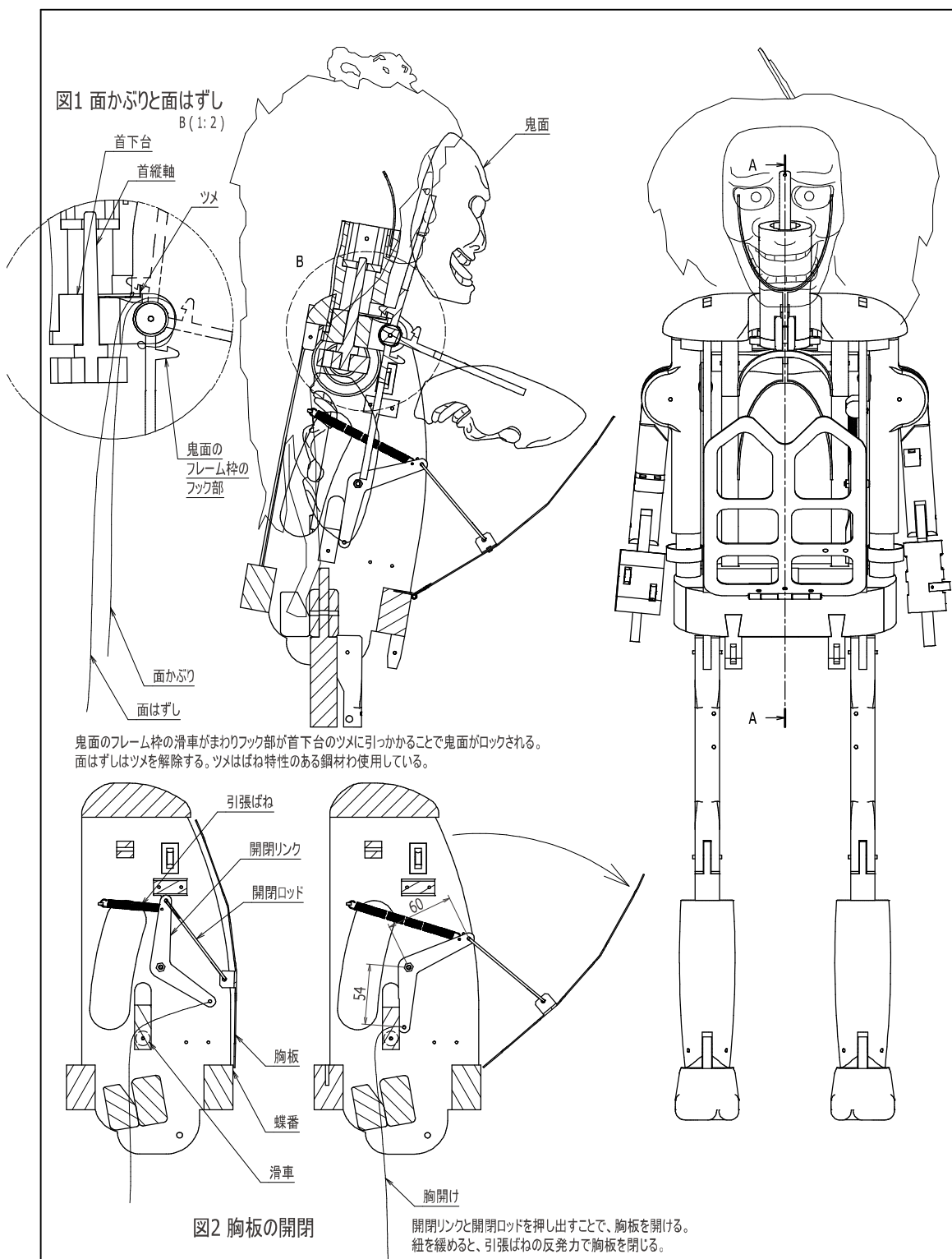






清影車 豊玉姫人形 部品表(1)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
01	豊玉姫人形	1		
02	樋	1	木質	
03	頭	1	木質	
04	鬼面	1	木質	
05	首	1	木質	
06	首戻しばね	1	鯨ヒケ	
07	首上板	1	木質	
08	首下台	1	木質	
09	ツメ	1	金属	
10	首縦軸	1	木質	
11	首横軸	1	木質	
12	戻しばね	2	りん青銅	
13	右腕縦軸	1	木質	
14	右上腕	1	木質	
15	右腕戻しばね	1	鯨ヒゲ	
16	右上腕滑車台	1	木質	
17	滑車	2	木質	
18	右前腕	1	木質	
19	右回内軸	1	木質	
20	右手	1	木質	
21	右回内滑車	1	木質	
22	右前腕滑車台	1	木質	
23	滑車	2	木質	
24	左腕縦軸	1	木質	
25	左上腕	1	木質	
26	左前腕	1	木質	
27	左手戻しばね	1	鯨ヒゲ	
28	左上腕滑車台	1	木質	
29	滑車	1	木質	
30	左腕戻しばね	1	鯨ヒゲ	
31	左回内滑車	1	木質	
32	左回内戻しばね	1	鯨ヒゲ	
33	左回内軸	1	木質	
34	右手首	1	木質	
35	右手	1	木質	
36	右太腿	1	木質	
37	右下腿	1	木質	
38	右足	1	木質	
39	左太腿	1	木質	
40	左下腿	1	木質	

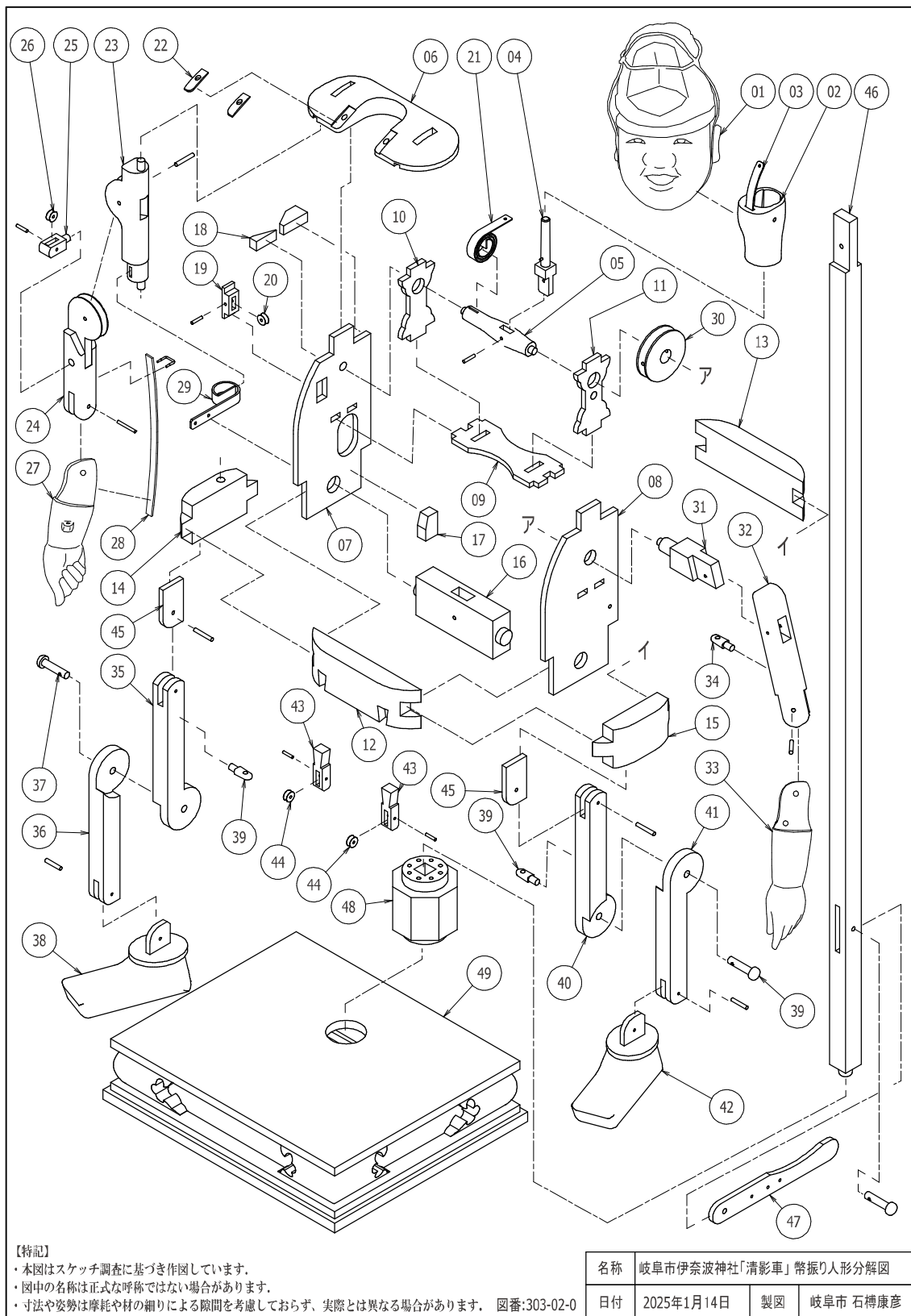
清影車 豊玉姫人形 部品表(2)				
見出し番号	名称	数量	材料	備考
41	左足	1	木質	
42	肩板	1	木質	
43	右側板	1	木質	
44	左側板	1	木質	
45	腰前	1	木質	
46	腰後	1	木質	
47	腰右	1	木質	
48	腰左	1	木質	
49	腰関節	1	木質	
50	腕制限前	2	木質	
51	腕制限後	2	木質	
52	肩滑車台	2	木質	
53	滑車	2	木質	
54	腰滑車台	2	木質	
55	滑車	2	木質	
56	腰制限	2	木質	
57	箱胴滑車台	1	木質	
58	滑車	3	木質	
59	箱胴滑車台	1	木質	
60	糸受け	1	木質	
61	胸板	1	真鍮	
62	蝶番	1	真鍮	
63	開閉リンク	1	真鍮	
64	胸板用滑車台	1	木質	
65	滑車	1	木質	
66	開閉ロッド	1	真鍮	
67	引張ばね	1	鋼材	
68	芯棒	1	木質	
69	芯棒滑車台	1	木質	
70	滑車	1	木質	
71	ツメ	1	木質	
72	押さえバネ	1	鋼材	
73	取手	1	木質	
74	フック	1	木質	
75	留め	1	木質	
76	操作板	1	木質	
77	台車	1	木質	
78	口口	1	木質	
79	台車口口	4	木質	
	ピン、ねじ、フェルト			



【特記】

- ・本図はスケッチ調査に基づき作図しています。
- ・図中の名称は正式な呼称ではない場合があります。
- ・寸法や姿勢は摩耗や材の細りによる隙間を考慮しておらず、実際とは異なる場合があります。 図番:302-06-0

名称	岐阜市伊奈波神社「清影車」豊玉姫人形説明図(1)		
日付	2025年1月14日	製図	岐阜市 石樽康彦





第四節 岐阜まつりのからくりの特徴

倒立や変身などの大技ではなく、舞を中心とした人形の動きをみせる演技である。これは、各関節が滑らかに動くさまに見応えを感じ、息の合った操作が求められる。滑らかな動きを実現するには、関節数を増やすことにつながり紐数も増し操作が複雑化する傾向にあるところ、紐の通し方や機構を休眠させるなどの工夫で、一本の紐で複数の関節を動かすようにしている。

人形収納箱の墨書き（注1）に基づけば、竹田源吉や荒川正兵衛の作品となるが、平成以前の修理履歴（注2）が残っていない状況なので、どのような状態で現在にいたっているか不明である。原本に近いものなら貴重である。また、私的な推論に過ぎないが、若戎車の轆振り人形の作風や構造は、箱書きの義経人形と若恵比寿人形とは異なり、もう一世代前という印象を受ける。今後の調査研究に期待したい。

からくりの要素技術として、「うなずき」、「会釈」、「お辞儀」、「面かぶり」、「扇子」、「変顔」が挙げられ、具体的に見ていく。

うなずきは、頭と首を接続する首軸で回る所作とし、動作は「顔を上げる」とする。紐を引いて緩める操作で実現している。八つのからくり人形のうち、七つに備わっている（注3）。

会釈は、首縦軸に直交した首横軸で回る所作とし、動作は「下を向く」とする。首振りの二本の操作紐を同時に引くことで実現している。八つのからくり人形のうち、六つに備わっている。

お辞儀は、支柱に胴体を固定する部材の腰関節軸で回る所作とし、動作は「腰落とし」、「腰折れ」とする。弁慶人形と豊玉姫に備わっている。

面かぶりは、名古屋市の紅葉狩車と神皇車、大山市の浦島と寿老台、大垣市の相生と愛宕などでみられる。お面は、喉元にある面かぶり滑車から延びた

柄に取り付けられ、胸中に隠されている。胸板を開けて面をかぶる。

構成される部品の多くは真鍮製で、胸板の開閉機構にレバー式か滑車式かの違いはあるものの原理は同じである。図5-3は滑車式の大垣市岐阜町「愛宕」の武内宿祢である。

扇子の開閉は、名古屋市の紅葉狩車、大山市の住吉台と老松と宝袋、大垣市の相生と布袋と愛宕などでみられる。扇子滑車を用いる機構と扇子の骨に直接紐をつなげる機構に分かれる。前者は掌に扇子滑車を埋め込み、これに扇子の骨を固定する。一方の扇子の骨は右手側に固定され、扇子の要を中心に扇子滑車が回ると、扇子が開く。後者は右の掌の軸に扇子の要を挿し込み、開ける方の扇子の骨に二本の紐をつなげ、一本は外側から潜らせる。二本の紐は互いに引き合う。一方の骨は掌側に固定される。図5-4は扇子滑車を用いた開閉構造を示す。

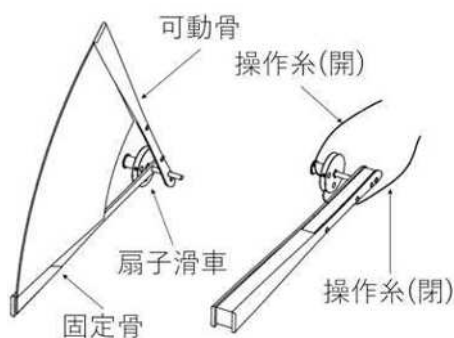


図5-4 扇子開閉の構造

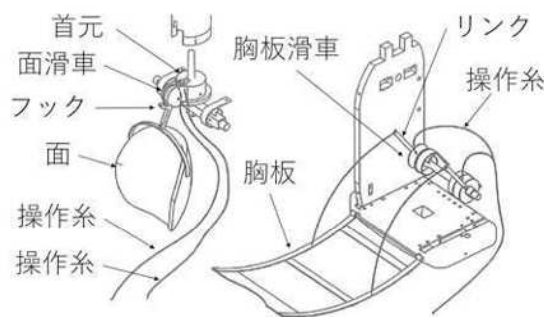


図5-3 面かぶりの構造

他の地域での変顔（注4）は、目を変える、舌を出す、口を開ける、の組み合わせであるが、安宅車の幣振り人形は眉が動く。現状では眉の動きが悪く、目、鼻、口の機能を有しているが動かない。

今回の調査において、からくりの痕跡やからくりの機能を有した状態で休眠していること。また、操作紐が切れたり、バネが折れたりして修繕が必要なことがわかった。今後、修理修復を行う場合には、その価値を損なわない取り組みが必要である。

（注）

（注1）製作者と製作年について、頭内に墨書きする場合がある。

義経人形の箱の墨書では、細工人は「荒川正兵衛」で「明治二十一年」出来とある。五代目玉屋庄兵衛の没年は明治二十一年であり、晩年の作の可能性がある。若恵比寿人形の箱の墨書では、「嘉永五年」「竹田源吉」の作とある。修理履歴報告書によると、「顔を

表 5-1 人形師の略歴

人形師	年号	場所	
竹田源吉	天保 7 (1836) 年	中川名古屋市区牛頭天王「蓮台」	
	天保13 (1842) 年	名古屋市筒井町神皇車「神功皇后」	
	弘化 2 (1845) 年	半田市亀崎石橋組「布さらし」	
	弘化 3 (1846) 年	名古屋市中村区紅葉狩車「磨振り人形」	
	嘉永 5 (1852) 年	岐阜市若戎車「若恵比寿人形」	*
	安政 4 (1857) 年	名古屋市中村区紅葉狩車「更科姫」	
	安政 5 (1858) 年	知多美浜町上野間日之出車	
五代目玉屋庄兵衛	文政10 (1827) 年	犬山市梅梢戯「倒立唐子」	
	天保 6 (1835) 年	常滑市大野紅葉狩車	
	嘉永 6 (1853) 年	東海市横須賀八公車「倒立唐子」	
	安政 2 (1855) 年	名古屋市中川区牛頭天王車「采振人形」	
	安政 3 (1856) 年	小牧市横町聖王車	
	文久 3 (1863) 年	常滑市大野紅葉狩車「倒立唐子」	
	明治21 (1888) 年	岐阜市安宅車「義経人形」	*

参考文献より抜粋し一覧にまとめた。 *印は、箱書きによる。

上げる」動作の戻り用の機構に滑車を用いている点が他とは異なる。

双方とも頭内の銘入れ未確認のため断定はできないが、活動時期や構造から推察すると可能性は高い（表5-1）。

（注2）修理履歴について、保管されている修理報告書をまとめると、

平成三年 （一九九一年） 若戎車 からくり人形修理詳細不明

平成九年 （一九九七年） 清影車 豊玉姫、大人形、前人形の復元新調 萬屋仁兵衛

工房

平成十一年 （一九九九年） 安宅車 義経人形と弁慶人形の修理 萬屋仁兵衛工房

平成十二年 （二〇〇〇年） 安宅車 前人形の修理 萬屋仁兵衛工房

平成二十二年 （二〇一〇年） 若戎車 若恵比寿人形の修理 萬屋仁兵衛工房

（注3）うなずきの機構（図5-15参照）

愛宕車 義経人形 うなずき有り 操作紐は後頭部から。紐を緩めると、自重で戻る。滑車式か不明。

弁慶人形 うなずき有り 操作紐は後頭部から。紐を緩めると、鯨ばねで戻る。

若戎車 幣振り人形 うなずき無し 操作紐は顎から。紐を緩めると自重で戻る。滑車式。

清影車 采振り人形 うなずき有り 痕跡のみ。鯨ばねで戻る。

彦火火出見尊 うなずき有り 操作紐は後頭部から。紐を緩めると、鯨ばねで戻る。

豊玉姫 うなずき有り 痕跡のみ。鯨ばねで戻る。

幣振り人形 うなずき有り 操作紐は後頭部から。紐を緩めると、鯨ばねで戻る。



(注4) 変顔の機構 (図5-6参照)

名古屋市	湯取神子車	笛吹人形	目
(比良)	二福神車	大黒人形	目
(広井)	二福神車	恵比寿人形	目と舌
		大黒人形	目と舌
	神功皇后車	神官人形	目と舌
	湯取車	笛吹人形	目
犬山市	遊漁神	恵比寿人形	目と口
	宝袋	魔振り人形	目と舌
大垣市	愛宕	神官人形	目と舌

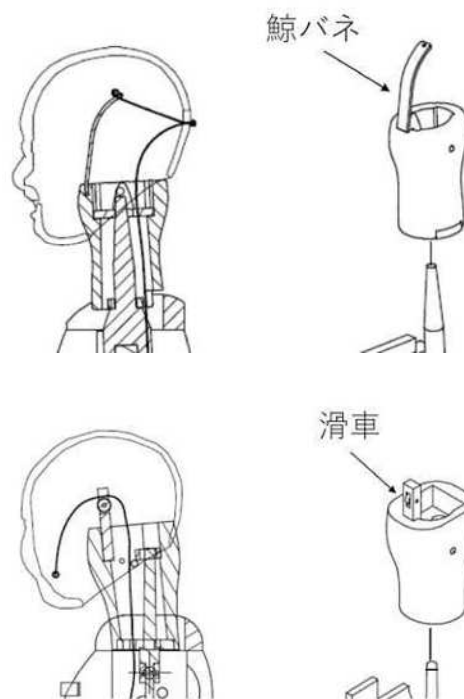


図 5-5 うなずき機構の構造の違い

- (参考文献)
- 山崎構成 『曳山の人形戯』 東洋出版 一九八一年
- 鬼頭秀明監修 『尾張の山車とからくり人形』 名古屋市長務局企画部百周年事業推進室 一九八九年
- 千田靖子 『図説 からくり人形の世界』 平文社 二〇〇五年
- 『大山祭のからくり調査報告書』 犬山市教育委員会 二〇一一年
- 『大垣祭総合調査報告書』 大垣市文化遺産活用推進事業実行委員会 二〇一四年
- 『名古屋市山車調査報告書一』 名古屋市教育委員会 一九九四年
- 『名古屋市山車調査報告書四』 名古屋市教育委員会 一九九七年
- 『名古屋市山車調査報告書五』 名古屋市教育委員会 一九九九年
- 『名古屋市山車調査報告書六』 名古屋市教育委員会 二〇〇一年
- 『名古屋市山車調査報告書七』 名古屋市教育委員会 二〇〇三年
- 『名古屋市山車調査報告書九』 名古屋市教育委員会 二〇〇八年

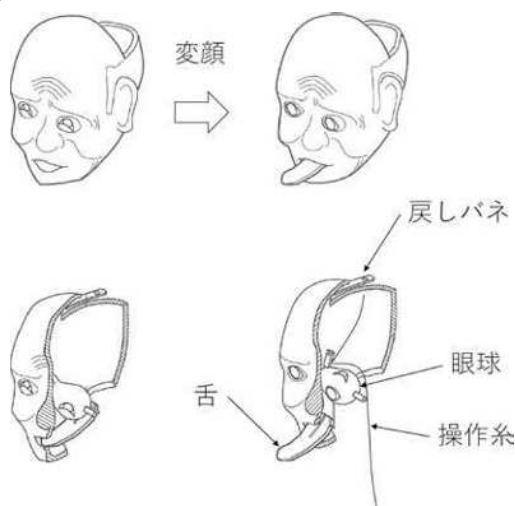


図 5-6 犬山市「宝袋」魔振り人形の構造